

史跡備前国分寺跡 保存整備事業報告書 1

— 第 I 期塔・講堂地区 —

2019年

岡山県赤磐市教育委員会

序

備前国分寺跡は、奈良時代に聖武天皇の発願により建立された国分寺のひとつであり、昭和50年に国指定を受けた後、その保存を図るために土地の公有化を進めてきました。

平成15年度からは史跡整備のための発掘調査を実施し、平成21年度から歴史学習の場として活用するための史跡整備事業に着手しました。施工面積が広大なため、地区区分を行って事業を進めているところです。このたびは、第Ⅰ期のうち塔・講堂地区の整備が完了したため、平成21～29年度における当該地区の保存整備事業の報告書を取りまとめることとしました。

また、平成30年5月には隣接する史跡両宮山古墳を構成文化財とする「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～」のストーリーが日本遺産に認定されました。そのため、さらなる両史跡の一体的活用が求められることとなります。両史跡が郷土の歴史を知り、学ぶ場となるよう今後も事業展開していきたいと考えています。

最後になりましたが、事業に際しましてご協力いただいた土地所有者をはじめ地元の皆様、設計にあたってご指導いただいた第二次山陽遺跡整備委員会の先生方、文化庁をはじめとする関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

令和元年12月

赤磐市教育委員会
教育長 内田 恵子

例 言

- 1 本書は史跡備前国分寺跡保存整備事業における第Ⅰ期塔・講堂地区の報告書である。
- 2 備前国分寺跡は岡山県赤磐市馬屋1048他に所在する。
- 3 対象とする期間は、史跡備前国分寺跡保存整備工事の第Ⅰ期塔・講堂地区を施工した平成21～29年度とする。なお、保存整備事業に伴う第1～8次の発掘調査は平成15～20・23・24年度に実施した。平成20年度以前の事業についても、保存整備事業の経過を理解するうえで必要と思われるものについては掲載した。
- 4 本事業は文化庁から国庫補助金（国宝重要文化財等保存整備費）の交付を受けて実施した。
- 5 本事業は第二次山陽遺跡整備委員会をはじめ文化庁、岡山県教育庁文化財課の指導及び助言を得て、赤磐市が実施した。
- 6 保存整備事業に伴う発掘調査の成果については、次の報告書を参照いただきたい。
第1～3次調査 『備前国分寺跡』 2009 赤磐市文化財調査報告第3集
第4～6次調査 『備前国分寺跡2』 2011 赤磐市文化財調査報告第5集
第7・8次調査 『備前国分寺跡3』 2015 赤磐市文化財調査報告第8集
- 7 本書の執筆は、赤磐市教育委員会の有賀祐史が行った。
- 8 保存整備事業の設計図、写真等は赤磐市教育委員会（赤磐市下市337）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は座標北である。遺跡付近における磁北は西偏7°24′を測る。図6・9の座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅴ系）に準拠している。図3・6・10・15・27・28は、昭和49年度に任意に設定した寺域座標に準拠している。寺域座標は、アルファベット2文字と数字の組み合わせで表記される。寺域西南隅（BA-0）から南へ60mを起点AA-0とする。X軸はAAラインから北へ3m毎にアルファベット2文字目をB・C・D…とする。Y軸は0ラインから東へ3m毎に1・2・3…とする。
- 2 図2は国土地理院発行の1/25,000地形図「万富」「金川」「岡山北部」「備前瀬戸」を複製・加筆したものである。
- 3 図10・15の発掘調査遺構図は、『備前国分寺跡』（2009）から複製・加筆したものである。
- 4 本文中に使用している建物造営尺は、『備前国分寺跡』（2009）で復元した1尺=0.297mを用いている。この単位尺の復元については、同書第5章第1節を参照されたい。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章	遺跡の位置と環境	1
1	備前国分寺跡とその周辺	1
2	備前国分寺跡の立地と現状	3
第2章	保存整備事業に至る経緯	7
1	緊急発掘調査と史跡指定	7
2	史跡の公有化	8
3	『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』の策定	9
4	史跡整備に伴う発掘調査の実施	11
5	『史跡備前国分寺跡整備基本設計書』の策定	12
6	第I期塔・講堂地区保存整備事業の体制	16
第3章	保存整備事業の経過	20
1	事業の概要	20
2	年度別事業概要	21
第4章	保存整備事業の概要	25
1	塔地区	25
2	講堂地区	30
3	礎石の表示と塚状の高まりの調査	44
4	今後の整備に向けての課題	46
5	今後の計画	46

図版

奥付

目次

図1 遺跡位置図 (1/2,000,000)	1	図16 講堂地区 造成平面図 (1/1,000)	34
図2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2	図17 講堂地区 基盤造成断面図 (No.A) (1/250)	35
図3 伽藍配置図 (1/1,600)	5	図18 講堂地区 基盤造成断面図 (No.+30~+10) (1/250)	36
図4 史跡指定範囲 (1/3,000)	10	図19 講堂地区 基盤造成断面図 (No.0~-20) (1/250)	37
図5 土地所有者区分 (1/3,000)	10	図20 講堂地区 基盤造成断面図 (No.-30~-40) (1/250)	38
図6 発掘調査区配置図 (1/1,600)	13	図21 講堂地区 整備詳細図1	39
図7 ゾーニング図 (1/2,500)	15	図22 講堂地区 整備詳細図2	40
図8 基本設計書における整備イメージ図	15	図23 講堂地区 整備詳細図3	41
図9 施設配置図 (1/2,000)	24	図24 講堂地区 整備詳細図4	42
図10 塔調査区 発掘調査遺構図 (平成16年度調査・1/200)	26	図25 講堂の解説板	43
図11 塔地区 整備詳細図1	27	図26 北面回廊の解説板	43
図12 塔地区 整備詳細図2	28	図27 講堂地区 礎石30・31 (1/60)	44
図13 塔地区 整備詳細図3	29	図28 講堂地区 塚状の高まり (1/60)	45
図14 塔の解説板	30		
図15 講堂調査区 発掘調査遺構図 (平成15年度調査・1/250)	33		

表目次

表1 史跡備前国分寺跡の公有化状況	9	表5 基本設計書における計画の内容	14
表2 史跡備前国分寺跡の所有者内訳	9	表6 塔地区の整備概要	25
表3 史跡整備に伴う発掘調査一覧	12	表7 講堂地区の整備概要	31
表4 基本設計書における考え方	12		

図版目次

図版1 塔地区	4 模擬礎石材料
1 塔地区 (北から)	5 模擬礎石施工状況 (西から)
2 塔地区 (北東から)	6 ロープ木柵設置状況 (北東から)
図版2 講堂地区	図版4 塔地区 平成21・22年度
1 講堂地区 (南東から)	1 舗装止め施工状況 (北から)
2 講堂地区 (南西から)	2 枕木階段2施工状況 (南西から)
図版3 塔地区 平成21・22年度	3 張芝施工状況 (南東から)
1 塔地区 着手前 (南から)	4 砕石路盤工施工状況 (北西から)
2 榎木伐木後 (東から)	5 石灯籠・地藏移設状況 (南から)
3 基壇盛土・縁石施工状況 (南西から)	6 解説板設置状況 (北から)

図版5 講堂地区 平成22～29年度

- 1 講堂地区 着手前 (南から)
- 2 暗渠排水管敷設状況 (東から)
- 3 暗渠排水管敷設状況 (南から)
- 4 礎石 (遺構石) 引き上げ (西から)
- 5 礎石 (遺構石) 仮置状況 (西から)
- 6 薬師堂・荒神様移設状況 (南から)

図版6 講堂地区 平成22～29年度

- 1 基盤造成盛土 (南から)
- 2 基盤造成完了状況 (南から)
- 3 縁石施工状況 (西から)
- 4 張芝施工状況 (南東から)
- 5 枕木階段2施工状況 (南から)
- 6 礎石 (遺構石) 表示状況 (西から)

図版7 講堂地区 平成22～29年度

- 1 碎石路盤工施工状況 (南西から)
- 2 真砂土舗装施工状況 (北東から)
- 3 真砂土舗装施工状況 (北東から)
- 4 雨落溝表示施工状況 (西から)

5 講堂解説板設置状況 (南から)

6 北面回廊解説板設置状況 (南から)

図版8 講堂地区 平成23年度

- 1 塚状の高まり 調査前 (西から)
- 2 塚状の高まりと薬師堂 (南西から)
- 3 塚状の高まり (西から)
- 4 礎石30・31検出状況 (南西から)
- 5 礎石30・31引き上げ後 (西から)
- 6 礎石21-a 検出状況 (南西から)

図版9 活用事業

- 1 塔地区現地見学会 (平成23年5月21日)
- 2 講堂地区現地見学会 (平成29年3月18日)
- 3 あかいわアートラリー2013 (平成25年10月)
- 4 赤磐市史跡シンポジウム (平成25年9月28日)
「発掘が語る 備前国分寺と奈良時代」
- 5 赤磐市歴史まなび講座 (平成26年9月27日)
「国分寺と国府」
- 6 歴史ウォーキング (平成25年11月30日)

第1章 遺跡の位置と環境

1 備前国分寺跡とその周辺

備前国分寺跡が所在する赤磐市西南部は、古代の赤坂郡に属し、官道である古代山陽道が通過し、高月駅家推定地や奈良時代の建物を検出した馬屋遺跡が認められる。また、古墳時代には備前最大規模を誇る両宮山古墳や同時期あるいは後続する前方後円墳や帆立貝形古墳が集中しており、備前国の枢要な地域であったことが窺える。これらの歴史的環境は、既刊の備前国分寺跡の調査報告書（赤磐市文化財調査報告3・5・8）において記載を行っているので、それらを参照いただきたい。ここでは備前国分寺跡を中心とした地域の概要を述べることにする。

赤磐市は岡山県東南部に位置し、県南部からの沖積平野と北部の吉備高原からの丘陵地からなり、南北に細長い市域をもつ。北は美作市・久米郡美咲町・久米南町、南及び西は岡山市・備前市、東は和気郡和気町と接する。東端には県の三大河川の一つである吉井川が南流し、西端に近接して同じく旭川が南流する。また、市西部には中規模河川の砂川が南北に貫流しており、これらの河川や支流に沿って盆地状の平野が形成され、丘陵と平地が入り組んだ地形となっている。遺跡は河川に沿って広がる平野もしくは平野に面した丘陵の先端に形成されており、備前国分寺跡も砂川中流域沿いの平野上に立地している。丘陵地の多くは花崗岩あるいはその風化土からなるが、南部では流紋岩や泥質岩なども分布する。

備前国分寺跡の位置する市西南部の砂川中流域平野は、東西約5.5km、南北約6.3kmを測り、海拔は11～25m、周囲を標高200～300mの山々に囲まれ、東側の丘陵は比較的低い。東には可真の盆地状平地、南には岡山市東区瀬戸町西北部の盆地状平地、南西には龍ノ口山塊を隔てて旭川下流域東岸平野が広がっている。

備前国分寺跡（1）は、岡山市との境界にある本宮高倉山（標高458m）の南東麓に形成された扇状地の南向き緩斜面に建立されている。東接して、備前地域最大の前方後円墳である両宮山古墳（2）が古墳時代中期後葉に築造されている。墳丘全長は206mを測り、農業用溜め池として残る内濠とともに外濠が発掘調査によって見つかっており、二重周濠を有する。備前国分寺跡の築地塀と両宮山古墳の外濠との距離は最短70mと近接する。その北には同じく二重周濠を有する陪塚の和田茶臼山古墳（3）があり、南には正免東古墳（4）・森山古墳（5）が築造されている。中期末には朱千駄古墳（6）・小山古墳（7）が築かれ、後期前半には廻り山古墳（8）が築造され、この地域一帯には中～大規模な前方後円墳が集中し、備前においては卓越した様相を呈する。

遺跡の北東には標高約40～90mの比較的低い丘陵（東高月丘陵）があり、弥生時代中期中葉から

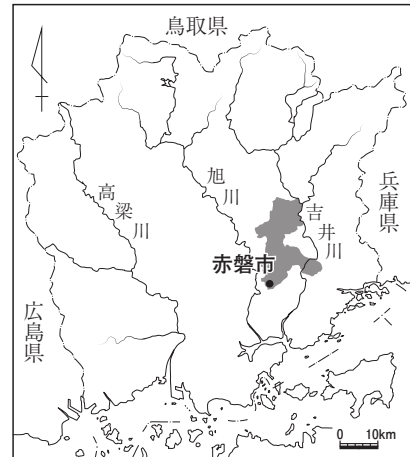


図1 遺跡位置図 (1/2,000,000)

後期初頭にかけての集落が丘陵の尾根や斜面などに立地している。中期後半の用木山（9）・惣図（10）・門前池遺跡（11）などの遺跡群は、この地域の拠点的な集落と考えられる。後期の遺跡は中期に対して、谷口や山裾の微高地などに立地する集落が多い。中期から続く門前池遺跡の他、門前池東方遺跡（12）が確認されている。この丘陵地からは墳墓も数多く確認されており、土壙墓群が確認された四辻土壙墓群（13）、愛宕山遺跡（14）、特殊器台・壺を伴う土壙墓群が検出された便木山遺跡（15）などがある。古墳時代前期の古墳としては、前方後円墳の用木3号墳（16）が築造され、後期後半には環頭大刀や雁木玉などの豊富な副葬品を伴った横穴式石室をもつ岩田14号墳（17）が築かれる。

遺跡の南には古代山陽道が想定されている。この古代山陽道を挟んで300mほど南、現在の仁王堂



- | | | | | |
|-----------|---------|------------|-----------|------------|
| 1 備前国分寺跡 | 6 朱千駄古墳 | 10 惣図遺跡 | 14 愛宕山遺跡 | 18 備前国分尼寺跡 |
| 2 両宮山古墳 | 7 小山古墳 | 11 門前池遺跡 | 15 便木山遺跡 | 19 馬屋森向遺跡 |
| 3 和田茶臼山古墳 | 8 廻り山古墳 | 12 門前池東方遺跡 | 16 用木古墳群 | 20 馬屋出水遺跡 |
| 4 正免東古墳 | 9 用木山遺跡 | 13 四辻土壙墓群 | 17 岩田14号墳 | 21 馬屋遺跡 |
| 5 森山古墳 | | | | |

図2 周辺遺跡分布図（1/25,000）

池に備前国分尼寺跡（18）が比定される。本格的に調査がなされていないため詳細は不明であるが、国分寺創建期と同範の瓦が出土している。また、馬屋森向遺跡（19）では平城宮式（6225型式系）の1点を除く軒丸瓦はすべて国分寺の創建瓦と同文であり、この北側が高月駅家である蓋然性は極めて高いとされる。馬屋出水遺跡（20）からは官衙との関係が推定される奈良時代の遺構・遺物が検出されており、馬屋遺跡（21）からも整然と配置された奈良時代の建物群が検出されており公的施設の可能性がある。また、国分寺創建期の軒瓦をはじめ多数の同範瓦が出土しており、国分寺の寺地を限るとみられる溝や国分寺と国分尼寺を結ぶと考えられる道も検出された。このように国分寺一帯は、奈良時代の公的施設が集中する地域といえる。国分寺と同じ高月郷に属する門前池遺跡では奈良時代の建物と考えられる遺構と多量の白鳳時代の瓦が確認されており、寺院あるいは官衙の可能性はある。

引用・参考文献

- 伊藤晃ほか 1995『松尾古墳群・斎富古墳群・馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 99 岡山県教育委員会
 宇垣匡雅 2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集 赤磐市教育委員会
 宇垣匡雅ほか 2009『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告第3集 赤磐市教育委員会
 神原英朗 1971～1977『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』1・2・4 山陽町教育委員会
 椿真治 1990「〔5〕馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20 岡山県教育委員会
 則武忠直ほか 1986『山陽町史』山陽町
 松本和男ほか 1975『門前池遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 9 岡山県教育委員会

2 備前国分寺跡の立地と現状

（1）遺跡の立地と現状

備前国分寺跡は、赤磐市西南部の標高100～300mの丘陵に囲まれた盆地状の平野部の西端に位置し、岡山市との境界にある本宮高倉山（標高458m）の南東麓に形成された扇状地の南向き緩斜面に建立されている。

遺跡は、北東の東高月丘陵上に開発された山陽団地に近接し、昭和40年代以降、寺域想定地内にも宅地開発が計画される中、昭和50年に国の指定を受け保存措置をとったため、現状では寺域内に宅地はなく、棚田状に水田が広がる。寺域は全体として、西北から東南に向かって下降して傾斜している。水田の他は、寺域西辺中央付近に国分寺八幡宮の境内地があり、寺域東南部に平成21年度より開始した史跡保存整備工事により塔基壇を整備し、寺域中央部付近では講堂基壇を整備している。寺域は、直線の畦畔によく反映されているが、標高の高い寺域西北部、寺域外西部は丘陵の傾斜に沿って水田が区画されている。

（2）既往の調査成果

平成15～20・23・24年度の史跡整備事業に伴う発掘調査において、今回の整備事業に反映すべき調査成果が多く得られた。その内容については、既刊の発掘調査報告書に掲載しているところであるが、ここに概要を記載する。合わせて、史跡整備事業において考慮すべき、備前国分寺跡の特徴的な

点について、簡単にまとめておく。また、今回実施した保存整備事業に係る塔・講堂については、整備のための基礎資料となるため詳細に記すこととする。

伽藍配置 東大寺式、いわゆる国分寺式伽藍配置をとる。南門・中門・金堂・講堂・僧房の主要建物が一直線上に並び、中門と講堂を結ぶ回廊の東へ塔を配置している。寺域を区画する築地塀は南北に長い長方形となり、堂塔を圍繞する。

金堂 回廊の内側に独立して配置されている。建物は、桁行7間（88尺）×梁行4間（46尺）で、柱間寸法は桁行11・12・14・14・14・12・11尺×梁行11・12・12・11尺と復元される。基壇規模は東西116尺（34.45m）、南北74尺（21.98m）と考えられる。金堂基壇は、基壇構築途中に礎石据付穴を穿って礎石を置き、さらに周囲に版築を施して完成されていることを確認できた。

創建以来の金堂は平安時代中期に大きく倒壊し、平安時代後期に改修あるいは再建を行っている。改修された建物がいつ廃絶したかははっきりしないが、講堂で見られる鎌倉時代前半や室町時代に属す瓦が出土しないので、金堂はこの時期には既に廃絶していたと考えられる。

講堂 講堂には、東西辺の南よりに回廊が取り付く。創建時の建物に用いられた礎石は、後世の水田耕作によって動かされ、原位置をとどめるものはなかった。しかし、礎石の抜取穴や落込穴によって、桁行7間（111尺）×梁行4間（54尺）で、柱間寸法は桁行13・17・17・17・17・17・13尺×梁行13・14・14・13尺と復元される。基壇規模は東西127尺（37.72m）×南北70尺（20.79m）と考えられる。礎石には長さ1.3～1.4m、厚さ70cm程度の自然石を利用している。遺存している根石の標高と礎石の厚みから、講堂基壇高は80cmと推定している。雨落溝は基壇の北・東・西の三方をめぐり、北で幅1.2mの現状素掘り溝として検出した。基壇外装の痕跡は認められず、基壇南辺の桁行中央間で階段の基底と推定される張り出しを確認した。基壇の出は8尺（2.38m）と考えられる。

建物は12世紀半ば～後半に火災に遭い焼失しているが、鎌倉時代前半に再建が始まっている。再建された建物は、基壇東北部に桁行5間（53尺）×梁行4間（42尺）もしくは内陣と外陣をもつ桁行5間（53尺）×梁行5間（52尺）の規模と推定される。この建物は16世紀後葉まで改修を受けながら存続していたと考えられ、備前国分寺の伽藍の中で最後まで残った建物の一つである。

中門 規模は、桁行5間（61尺）×梁行2間（24尺）で、柱間寸法は桁行12・12・13・12・12尺×梁行12・12尺と復元される。軒の出は6尺（1.78m）で、基壇規模は東西73尺（21.68m）×南北36尺（10.69m）となる。屋根は単層の切妻造りで五間三戸の門であったと推定される。近世に中門上に池が掘られ、大幅に基壇が削平されてしまっている。

南門 規模は、桁行5間（58尺）×梁行2間（22尺）で、柱間寸法は桁行11・12・12・12・11尺×梁行11・11尺と復元される。軒の出は10尺（2.97m）と推定され、基壇規模は東西78尺（23.17m）×南北42尺（12.47m）となる。屋根は重層の入母屋造りと考えられ、五間三戸の門である。中門よりも基壇規模が大きく、出土した瓦から、講堂と同様に補修を重ねながら維持された建物の一つであったと考えられる。

僧房 創建期の僧房は桁行250尺（25間×10尺等間）、梁行20尺（2間×10尺等間）と復元でき、少なくとも西から2房分は3間1房の可能性が推定できる。建物西端南面において、瓦積基壇外装を確認している。建物は中央より東で創建期僧房の柱位置を踏襲もしくはやや移動して建物の建替えあるいは改修を行っているが、12世紀後半頃にはこの建物も廃絶していると考えられる。

塔 花崗岩製の心礎を中心に根石を検出し、その規模は10尺等間の一辺30尺（8.91m）である。基壇

規模は、一辺60尺（17.82m）で、軒の出15尺（4.46m）と復元される。塔の根石に二次的な改変は認められず、心礎上に鎌倉時代の作と考えられる石造七重層塔が建っていることや出土した土器・瓦から、塔は平安時代中期には廃絶し、その後、再建されることはなかったと考えられる。基壇南辺中央部付近で基壇と平行して創建当初のものでない石列を検出したため、後世に登壇のための構造物を造作した可能性がある。基壇外装の痕跡はなかった。基壇高は根石上面高と礎石の想定される厚みから推定して、1.2～1.8mと考えた。

回廊 複廊で、中門を発し講堂に取り付く。梁行は9尺（2.67m）等間であり、北・南面西回廊及び西面回廊は原位置で礎石の多くが遺存する。西面回廊の桁行は12尺（3.56m）を基本としている。

変遷 奈良時代に創建後、平安時代中期に塔が失われ、続いて金堂が倒壊したとみられる。平安時代後期には金堂が復旧されるも、平安時代末に講堂と回廊が焼失し、金堂も同時に倒壊した可能性がある。僧房は、10世紀代に建物の建替えあるいは改修を行っているが、12世紀後半頃には廃絶していると考えられる。その後、金堂は復興されず伽藍の中心は講堂となるため、平安時代末が備前国分寺の

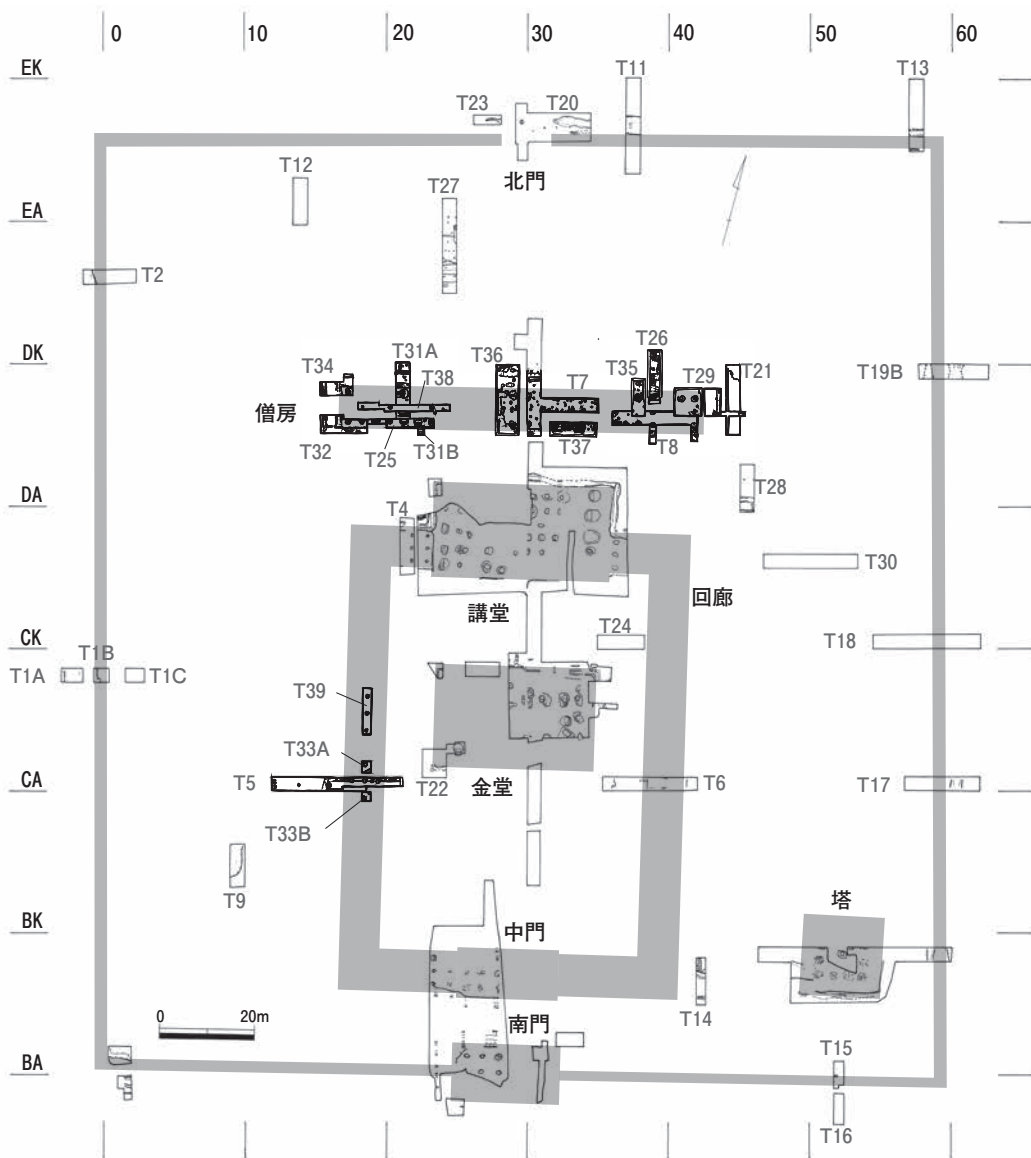


図3 伽藍配置図 (1/1,600)

維持活動にとって最大の画期であったと位置付けられる。鎌倉時代には講堂が再興され、南門も補修される。16世紀後半から17世紀初頭に講堂が焼亡し、寺院としての機能は失われる。

特徴 備前国分寺跡の伽藍配置は、東大寺式いわゆる国分寺式であり、国分寺建立の詔段階で最もふさわしい伽藍配置をとっている（有賀2013）。そのなかで特徴的なのは、回廊が金堂を囲み中門と講堂を結ぶことで、しかも回廊は複廊を採用している。平城京諸大寺に通有な伽藍配置と複廊を採用した寺院といえる。さらに回廊の西半は原位置で礎石が良好に残っており、地中レーダー探査の成果などを合わせ、その復元案を提示した（有賀編2015）。複廊の梁行柱間は9尺等間で、桁行柱間は12尺を基本としている。整備において複廊を表示することが、地方にあって平城京諸寺院と同じように壮麗な伽藍をもった国分寺であることを表現できると考えられる。

僧房は桁行250尺（10尺等間×25間）で、梁行20尺（10尺等間×2間）を想定している。房割は桁行を3間あるいは2間の2種類で区切って1房とした可能性があり、その復元案を提示している（有賀編2015）。讃岐国分寺跡では僧房が良好に検出されているが、全国的に房割を推定できる例は少なく、これを提示することは、国分寺建立の詔にある、「僧寺には20人の僧侶を住まわす」という実態を理解するのに役立つのではないと思われる。

寺域内における金属製品生産についても明らかになりつつあり（有賀ほか2011）、寺域北部及び東部、中心伽藍においては回廊で金属製品生産の様相が認められた。寺域北部及び東部に金属関係工房が置かれている指摘とも合致する（杉山1983）。金属製品は銅ならびに鉄製品と想定され、国分寺創建段階から施設営繕段階まで設けられたようである。

備前国分寺跡の礎石石材は、金堂・講堂・西面回廊が流紋岩、塔が花崗岩を使用していると概略を報告した（有賀ほか2011）。その後、講堂の礎石について強溶結凝灰角礫岩という石材で、備前国分寺跡の西に隣接する赤磐市馬屋の山地あるいは麓から採取されたものと推測された（鈴木ほか2015）。つまり、遺跡に比較的近い場所で産出する石材を使用するという石材調達状況が判明したわけである。後述するが、現在この石材は採取することができず、整備には利用することができなかった。

引用・参考文献

有賀祐史ほか 2011 『備前国分寺跡2－第4～6次調査－』 赤磐市文化財調査報告第5集 赤磐市教育委員会

有賀祐史 2013 「国分寺の伽藍配置と回廊形式」 『半田山地理考古』 第1号 岡山理科大学地理考古学研究室

有賀祐史編 2015 『備前国分寺跡3－第7・8次調査（僧房・西面回廊）－』 赤磐市文化財調査報告第8集 赤磐市教育委員会

宇垣匡雅ほか 2009 『備前国分寺跡』 赤磐市文化財調査報告第3集 赤磐市教育委員会

杉山洋 1983 「寺院付属の金属関係工房」 『佛教藝術』 148号 毎日新聞社

鈴木茂之・西村仁秀・有賀祐史 2015 「備前国分寺礎石の岩石特徴と産地の推定」 『岡山大学地球科学研究報告』 第22巻第1号

岡山大学理学部地球科学教室

第2章 保存整備事業に至る経緯

1 緊急発掘調査と史跡指定

(1) 緊急発掘調査

昭和44年度から遺跡の後背丘陵（東高月丘陵）に当時の住宅需要に応じるため県営山陽団地の造成が開始され、備前国分寺の寺域推定地内にも宅地造成が進行しつつあった。そのため、昭和49年度に寺域及び主要伽藍を把握する目的で「備前国分寺跡緊急発掘調査委員会」が組織され、国の補助を受けて調査が行われた。この調査前には、塔などの一部建物の礎石と思われるもののほか出土瓦以外は、寺域や建物配置などは不明に近かった。しかしながら、調査によって東西600尺、南北ははっきりしないまでも800尺程度内の寺域が推定され、南門・中門・金堂・塔・僧房と考えられる主要建物を検出した。寺域の東南隅に塔を配置する、いわゆる国分寺式（東大寺式）の伽藍配置であることが判明した。

引用・参考文献

備前国分寺跡発掘調査団 1975『備前国分寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 10 岡山県教育委員会

(2) 史跡指定

昭和49年度の緊急発掘調査成果を受けて、昭和50年7月19日に「備前国分寺跡」として史跡指定を受けた。

委保第25の9号

文化財保護法（昭和25年法律第214号）第69条第1項の規定により、下記1の記念物を下記2によって史跡に指定します。

昭和50年7月19日

文部大臣 永井 道雄

- | | | |
|---|-------------|--|
| 1 | (1) 名称 | 備前国分寺跡 |
| | (2) 所在地及び地域 | 別紙（官報告示写し）の所在地欄及び地域欄記載のとおり。 |
| 2 | (1) 指定理由 | |
| | (ア) 基準 | 特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準
史跡3（社寺の跡）による。 |
| | (イ) 説明 | 備前国のほぼ中央、史跡両宮山古墳の西に位置し、山陽道に面している。
昭和50年に岡山県教育委員会が発掘調査を行い、その寺域を確め、主要伽藍を検出した。主要伽藍は、寺域中軸線上に南門、中門、金堂、講堂、僧房、小子房が連なっており、ほぼ600尺四方の範囲におさまる。また、出 |

土遺物から本寺跡は奈良時代から室町時代にわたって存続していたことが知られた。本寺跡は、極めて良好な環境の下に寺跡を残し、遺構もほぼ完存する国分寺跡であり、律令制下の備前国をうかがう重要な遺跡である。

(2) 官報告示

昭和50年7月19日付け文部省告示第119号

名 称	地名	地 域
備前国分寺跡	岡山県赤磐郡山陽町 馬屋字塔下	601番、602番、603番、1030番、1031番、1032番、1033番、1034番、1035番、 1036番、1038番
	同 字笠井	938番、939番、945番、946番、947番、973番、974番の1、975番の1、976番、977 番、978番、979番の2、980番の1、981番、982番、983番、984番、985番の1、990番、 995番の1、996番の1、997番、998番の1、999番の1、1003番の1、1005番の1
	同 字鍛冶屋後	953番、968番の1、969番の1、970番、971番、972番
	同 字片山	986番の1、987番、988番の1、988番の2、989番の1、991番、992番、993番、1000 番、1020番、1023番、1024番、1025番、1026番、1027番、1028番、1042番、 1045番、1046番、1047番、1048番、1049番の1、1049番の2、1050番、1051番、 1052番、1053番、1054番、1055番、1056番、1057番の1、1059番、1060番、 1061番、1062番、1063番、1064番
		地域内に介在する道路敷及び水路敷を含む。

2 史跡の公有化

史跡指定後、昭和50～61年度・平成8～14年度に、国庫補助金を受けながら史跡地の公有化を進めた。平成14年度末で史跡地の9割を買い上げ、民有地3筆・神社有地1筆・官有地2筆を残して一旦公有化を終了し、後述するように平成15年度から史跡保存整備事業に伴う発掘調査を開始した。公有化の状況を表1に示した。

講堂地区に位置する官有地2筆については、本保存整備事業に伴って平成22年度に財務省中国財務局岡山財務事務所から市有地化したため、平成30年度末において民有地3筆・神社有地1筆を除いて史跡地を公有化したことになる。

表1 史跡備前国分寺跡の公有化状況

年度	内容		面積 (㎡)	総事業費 (円)	国庫補助金額 (円)
S44	買上	馬屋 1036	1,262	150,000	—
S50	買上	馬屋 1028 他 3 筆	2,931.26	52,789,176	42,104,000
S51	買上	馬屋 601 他 4 筆	2,494	11,020,600	8,816,000
S52	買上	馬屋 603	664	3,242,200	2,593,000
S53	買上	馬屋 978-1 他 1 筆	836.47	13,289,000	10,631,000
S54	買上	馬屋 1048	1,093	9,290,000	7,432,000
S56	買上	馬屋 981 他 3 筆	1,379	8,508,200	6,806,000
S57	買上	馬屋 1045	2,159	23,867,000	19,093,000
S58	買上	馬屋 1030 他 4 筆	1,909	16,182,000	12,945,000
S59	受贈	馬屋 1064-2	1.08	—	—
S60	買上	馬屋 1049-1 他 3 筆	3,182	27,387,650	21,909,000
S61	買上	馬屋 602 他 3 筆	1,676	12,839,000	10,271,000
H 8	買上	馬屋 1027 他 4 筆	3,357	37,257,000	29,805,000
H 9	買上	馬屋 939-1 他 3 筆	2,797	37,543,500	30,030,000
H10	買上	馬屋 971-1 他 8 筆	4,224	60,132,400	48,105,000
H11	買上	馬屋 992 他10筆	6,603	89,368,500	71,494,000
H12	買上	馬屋 969-1 他 5 筆	3,852	56,397,550	45,116,000
H13	買上	馬屋 969-3 他 4 筆	3,214	45,905,035	36,724,000
H14	買上	馬屋 968-1 他 3 筆	1,967.16	77,495,970	61,996,000
H22	買上	馬屋 982 他 1 筆	48	271,000	—
合計			(*)45,648.97	582,935,781	465,870,000

*64.65㎡（公衆用道路）を除く。

表2 史跡備前国分寺跡の所有者内訳

内容	面積 (㎡)	割合 (%)
市有地	45,713.62	93.1
民有地	1,129.00	2.3
神社有地	2,270.00	4.6
合計	(*)49,112.62	

*指定時は49,116.97㎡であるが、指定後の分筆減（▲4.35㎡）による。道路敷・水路敷を含まない面積である。

3 『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』の策定

平成8年度に当時の山陽町内の遺跡の保存整備計画を策定するため、山陽町遺跡整備委員会を設置した。平成8・9年度に開催した委員会の協議・検討をもとに『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』を刊行した。その目的は、史跡である備前国分寺跡や両宮山古墳をはじめとする数多くの文化財の保存と活用のための計画立案を行い、これからのまちづくりに反映させることである。



图4 史跡指定範圍 (1/3,000)

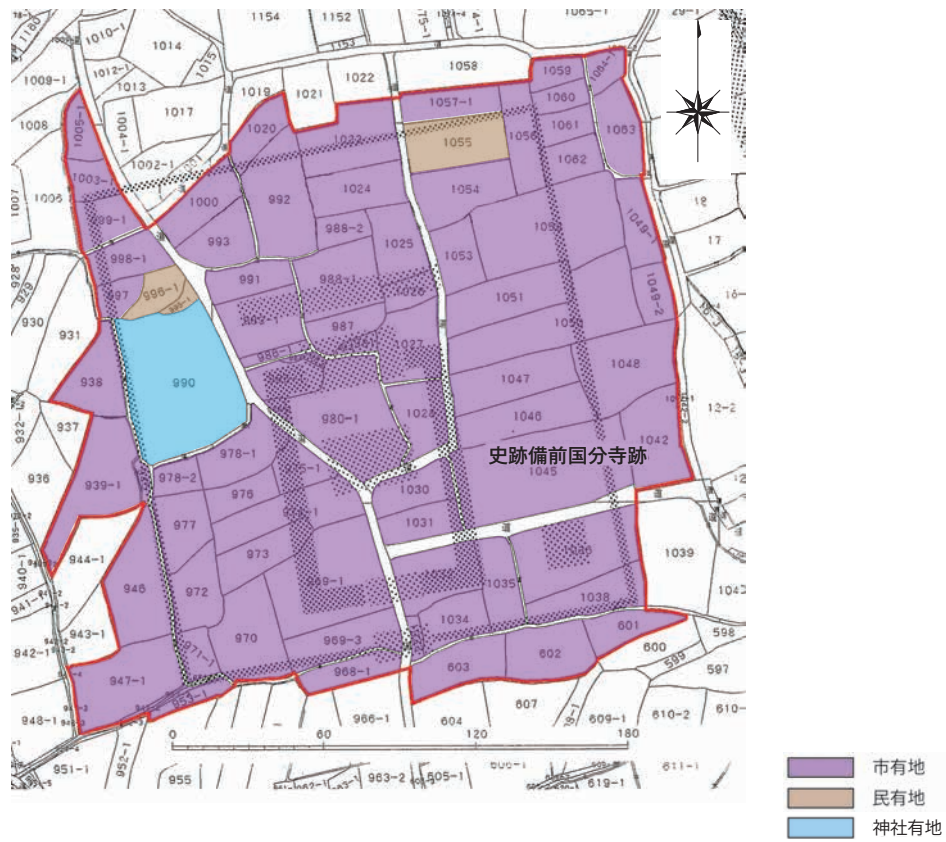


图5 土地所有者区分 (1/3,000)

計画書において、備前国分寺跡を整備拠点地区で、早期の保存活用整備が望まれる遺跡とし、整備のための発掘調査の必要性を述べている。計画書に記載している備前国分寺跡地区の整備方針は次のとおりである。

備前国分寺跡地区	<p>今後さらなる組織的、計画的発掘調査等各種調査を進め、遺構の解明を図り、関係者等の協議・調整等を踏まえ、用地の公有化を推進する。また、必要に応じ周辺域の史跡の追加指定を図る。各種調査等の成果を踏まえ、各遺構の保存並びに活用整備手法等を十分に検討・研究し、早期整備を図る。</p> <p>(遺構の整備に係る検討事項)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建物遺構の復元（備前古代文化のモニュメント的存在としての整備） ・建物跡等遺構の表示 ・礎石等遺構の露出展示 <p>(その他整備に係る検討事項)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伽藍配置の表示（縮小模型等含む） ・休養施設（四阿、ベンチ等）を含む広場等整備 ・アクセス道路、園路の整備 ・案内板、解説板等の設置 ・植栽 ・駐車場、駐輪場の整備
----------	--

引用・参考文献

山陽町 1998 『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』

4 史跡整備に伴う発掘調査の実施

平成13年度に第二次山陽町遺跡整備委員会を発足させ（市制施行後は第二次山陽遺跡整備委員会）、備前国分寺跡などの調査計画について指導を仰ぎ、整備に向けて動き出した。平成14年度に史跡地の9割を公有化し、史跡整備のための資料を得る目的で平成15～17年度に発掘調査を実施することとした。調査内容は、主に主要建物の規模・構造、そして寺域の範囲確認である。この3か年の調査後、詳細把握のできなかった僧房や回廊などを中心に平成18～20・23・24年度に調査を継続した。これら平成15年度以来8次にわたる調査の結果、金堂や塔などの主要建物の規模・構造や寺域の広がりが明らかになった。すなわち、国分寺が「国の華」と称されるにふさわしいものであったことが判明したのである。これらの調査成果については、3冊の報告書にまとめており、第1章で触れたとおりである。

表3 史跡整備に伴う発掘調査一覧

調査年度	調査回数	内容（調査区）	調査面積（㎡）	文献
平成15（2003）	1	講堂、T 2・3・7	1,030.00	1
平成16（2004）	2	南門、中門、塔、T 4	740.40	1
平成17（2005）	3	金堂、T 5・6・8～13・15～19	924.98	1
平成18（2006）	4	T 1・14・20～24	288.88	2
平成19（2007）	5	T 25～28	147.36	2
平成20（2008）	6	T 30～34	167.00	2
平成23（2011）	7	T 29・36	135.00	3
平成24（2012）	8	T 35・37～39	102.75	3

文献（1）宇垣匡雅ほか 2009『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告第3集 赤磐市教育委員会

（2）有賀祐史ほか 2011『備前国分寺跡2－第4～6次調査－』赤磐市文化財調査報告第5集 赤磐市教育委員会

（3）有賀祐史編 2015『備前国分寺跡3－第7・8次調査（僧房・西面回廊）－』赤磐市文化財調査報告第8集 赤磐市教育委員会

5 『史跡備前国分寺跡整備基本設計書』の策定

平成15年度から3か年にわたる史跡整備に伴う発掘調査を経て、平成18年度には『史跡備前国分寺跡整備基本設計書』を第二次山陽遺跡整備委員会の指導及び助言を得て策定した。これは平成9年度に策定した基本計画における備前国分寺跡地区の整備計画を具体化したものである。基本設計における整備概要は次のとおりであるが、実施設計において整備内容を再検討し変更した部分もある。

表4 基本設計書における考え方

<p>●備前国分寺跡の特徴・長所</p> <p>a) 現在、寺域全域が見渡せる。</p> <p>b) 北西から南東へ向けて緩傾斜のある寺域である。また、一部を除き寺域のほぼ全域が公有化されている。</p> <p>c) 回廊が複廊である。</p> <p>d) 両宮山古墳や茶臼山古墳などの遺跡が近接している。</p>
<p>●特徴・長所の利活用方針</p> <p>a) 計画地内のどこからでも寺域が理解できる整備を行う。</p> <p>b) 可能な限り寺域全域の往時の地形復元を行う。</p> <p>c) 回廊が複廊であったことがわかる整備を行う。</p> <p>d) 当国分寺跡のみでなく、周辺の遺跡などを含めた一体的活用整備を行う。</p>
<p>●特徴・長所の整備方法</p> <p>a) 各遺構を復元展示や立体表示を行い、往時の姿を理解できる整備を行う。</p> <p>b) 発掘調査資料をもとに、地形造成を行う。</p> <p>c) 礎石及び中壁を平面または、立体表示で整備を行う。</p> <p>d) 縮小地形模型やガイダンス施設等で周辺遺跡の概要や解説を行う。</p>

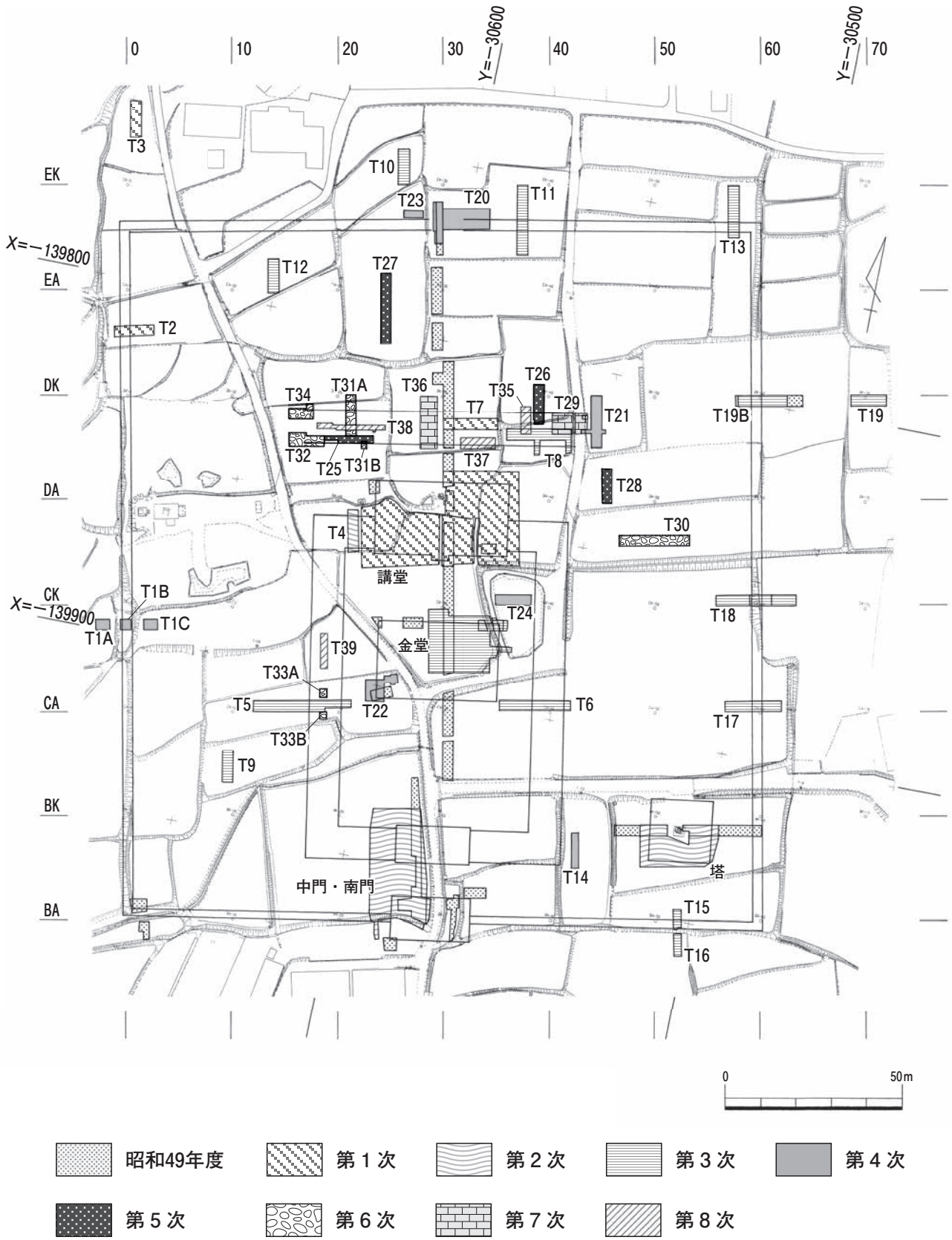


図6 発掘調査区配置図 (1/1,600)

表5 基本設計書における計画の内容

項目	内容	備考
造成工	盛土、切土等	
雨水排水工	側溝、枙他	
遺構整備施設工	築地跡復元展示	
	築地跡立体表示	盛土、植栽
	築地跡平面表示	透水性真砂土舗装
	南門跡基壇立体表示	盛土、礎石表示
	中門跡基壇立体表示	盛土、礎石表示
	金堂跡基壇立体表示	盛土、礎石表示
	講堂跡基壇立体表示	盛土
	回廊跡基壇立体表示	盛土、東側礎石表示
	塔跡基壇立体表示	盛土、礎石表示
	僧房跡基壇平面表示	透水性真砂土舗装
	回廊内	砂利敷き
	建物規模表示	透水性脱色アスファルト舗装
	園路広場工	管理道
エントランス広場		石灰岩ダスト舗装
築地内広場		種子吹付
学習施設工	案内板	入口部に設置
	解説板	遺構整備施設に設置
	名称板	遺構整備施設に設置
	周辺縮小模型	
休養施設工	ベンチ等	
植栽工	新規植栽	修景、景観、遮蔽植栽

史跡指定地は広範囲に及ぶため、全体をⅠ～Ⅵの6期に区分し事業を進めることとした。第Ⅰ期整備として、塔地区と中心伽藍地区北部（講堂・僧房地区）を設定し、平成19年度にその実施設計を行った。そして、発掘調査と併行して平成21年度から保存整備事業に着手した。

第Ⅰ期整備は平成21・22年度に塔地区を実施し、平成22年度には講堂地区の基盤造成に入った。講堂地区は最終的に平成29年度に完了したが、長年懸案であった隣接する史跡両宮山古墳の墳丘裾の浸食・崩落を防止する工事の緊急性が高く、平成29年度から優先して実施することとした。そのため、第Ⅰ期整備のうち未実施の僧房地区は、やむを得ず両宮山古墳の墳丘裾保存整備工事期間は休止することとした。

引用・参考文献

赤磐市 2007『史跡備前国分寺跡整備基本設計書』

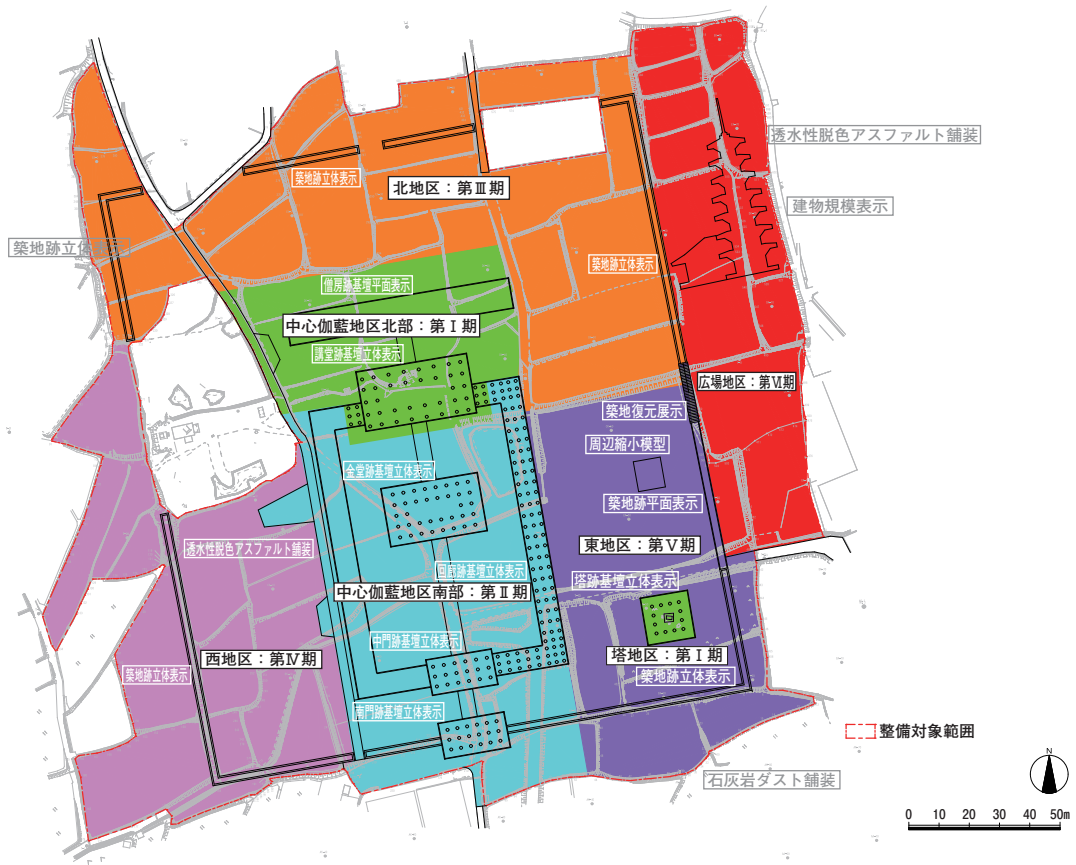


図7 ゾーニング図 (1/2,500)

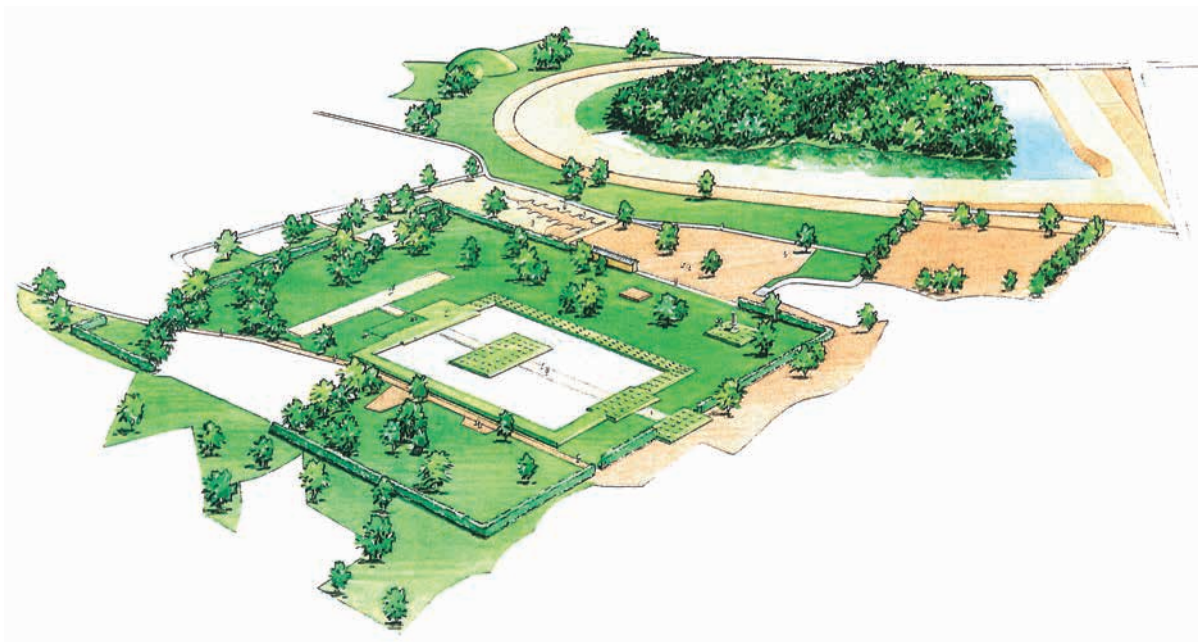


図8 基本設計書における整備イメージ図

6 第I期塔・講堂地区保存整備事業の体制

(1) 組織

※各所属等は、期間における最新のものを記載している

第二次山陽遺跡整備委員会

平成21～28年度

- 委員長 伊藤 晃 (元岡山県古代吉備文化財センター参事)
副委員長 亀田 修一 (岡山理科大学生物地球学部教授)
委員 狩野 久 (元岡山大学文学部教授)
河本 清 (元くらしき作陽大学食文化学部教授)
中村 一 (京都大学名誉教授)
箱崎 和久 (奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室室長)

平成29年度

- 委員長 亀田 修一 (岡山理科大学生物地球学部教授)
副委員長 平井 泰男 (元岡山県古代吉備文化財センター所長)
委員 今津 勝紀 (岡山大学大学院社会文化科学研究科教授)
清家 章 (岡山大学大学院社会文化科学研究科教授)
箱崎 和久 (奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室室長)
前川 歩 (奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室研究員)

指導・助言

文化庁文化財部記念物課 文化財調査官 市原 富士夫 (平成21～26年度)
文化財調査官 青木 達司 (平成27～29年度)

岡山県教育庁文化財課 光永 真一 (平成21年度)
宇垣 匡雅 (平成22～24年度)
大橋 雅也 (平成25～28年度)
柴田 英樹 (平成29年度)

事務局 赤磐市教育委員会

社会教育課

教育長 花田 文甫 (平成21年度)	課長 奥田 智明 (平成21・22年度)
教育長 土井原 敏郎 (平成21～25年度)	課長 正好 尚昭 (平成23～25年度)
教育長 永島 英夫 (平成25年度)	課長 前田 正之 (平成26・27年度)
教育長 杉山 高志 (平成26～28年度)	課長 土井 道夫 (平成28・29年度)
教育長 内田 恵子 (平成29年度)	副参事 高田 恭一郎 (平成23～25年度)
教育次長 藤原 洋文 (平成21年度)	副参事 金田 善敬 (平成26～28年度)
教育次長 宮岡 秀樹 (平成22～25年度)	主幹 澤山 孝之 (平成21・22年度)
教育次長 奥田 智明 (平成26～28年度)	主査 有賀 祐史 (平成21～29年度)
教育次長 藤井 和彦 (平成29年度)	主事補 畑地 ひとみ (平成21～29年度)
	嘱託 山口 香織 (平成29年度)

(2) 事業の経過

- 平成8年7月18日 山陽町遺跡整備委員会設置
- 平成10年12月 『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』策定
- 平成13年9月28日 第二次山陽町遺跡整備委員会設置
- 平成15年6月23日～平成16年1月19日
保存整備事業に伴う第1次発掘調査実施
(講堂調査区、T2・3・7)
- 平成16年6月9日～平成17年1月14日
保存整備事業に伴う第2次発掘調査実施
(南門・中門調査区、塔調査区、T4)
- 平成17年6月7日～平成18年2月27日
保存整備事業に伴う第3次発掘調査実施
(金堂調査区、T5・6・8～13・15～19)
- 平成18年6月13日～平成18年9月8日
保存整備事業に伴う第4次発掘調査実施 (T1・14・20～24)
- 平成19年3月 『史跡備前国分寺跡整備基本設計書』策定
- 平成19年9月5日～平成19年11月5日
保存整備事業に伴う第5次発掘調査実施 (T25～28)
- 平成20年3月 史跡備前国分寺跡保存整備工事実施設計策定 (第I期分)
- 平成20年9月22日～平成20年12月11日
保存整備事業に伴う第6次発掘調査実施 (T30～34)
- 平成21年2月3日 平成20年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会
塔地区整備案を審議
- 平成21年2月28日 『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告第3集刊行
保存整備事業に伴う第1～3次発掘調査成果をまとめる
- 平成21年8月7日 平成21年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会
塔地区整備案を審議
- 平成21年10月30日～平成22年2月28日
平成21年度史跡備前国分寺跡保存整備工事 (第I期第1年次)
- 平成22年2月18日 平成21年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会
塔・講堂地区整備案を審議、塔地区整備状況を視察
- 平成22年10月8日 平成22年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会
塔・講堂地区整備案を審議
- 平成22年11月11日～平成23年3月18日
平成22年度史跡備前国分寺跡保存整備工事 (第I期第2年次)
- 平成23年2月7日 平成22年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会

- 塔・講堂地区整備案を審議、塔地区整備状況を視察
- 平成23年2月28日 『備前国分寺跡2』赤磐市文化財調査報告第5集刊行
保存整備事業に伴う第4～6次発掘調査成果をまとめる
- 平成23年5月13日 平成23年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議、塔・講堂地区整備状況を視察
- 平成23年5月21日 史跡備前国分寺跡塔地区現地見学会
- 平成23年10月11日～平成23年12月6日
保存整備事業に伴う第7次発掘調査実施（T29・36）
- 平成23年10月25日～平成24年2月29日
平成23年度史跡備前国分寺跡保存整備工事（第I期第3年次）
- 平成23年11月18日 平成23年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議、講堂地区整備状況を視察
- 平成24年11月21日～平成25年2月28日
平成24年度史跡備前国分寺跡保存整備工事（第I期第4年次）
- 平成24年12月14日 平成24年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議
- 平成25年1月16日～平成25年3月12日
保存整備事業に伴う第8次発掘調査実施（T35・37～39）
- 平成25年2月27日 平成24年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議、講堂地区整備状況を視察
- 平成25年7月31日～平成25年12月20日
平成25年度史跡備前国分寺跡保存整備工事（第I期第5年次）
- 平成25年8月1日 平成25年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議
- 平成25年9月28日 史跡シンポジウム“発掘が語る備前国分寺と奈良時代”開催
- 平成26年2月26日 平成25年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議、講堂地区整備状況を視察
- 平成26年7月22日～平成26年11月28日
平成26年度史跡備前国分寺跡保存整備工事（第I期第6年次）
- 平成26年7月25日 平成26年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議
- 平成27年2月26日 平成26年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議、講堂地区整備状況を視察
- 平成27年2月28日 『備前国分寺跡3』赤磐市文化財調査報告第8集刊行
保存整備事業に伴う第7・8次発掘調査成果をまとめる
- 平成27年7月17日 平成27年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会
講堂地区整備案を審議

平成27年8月21日～平成27年11月30日

平成27年度史跡備前国分寺跡保存整備工事（第Ⅰ期第7年次）

平成28年2月9日 平成27年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会

講堂地区整備案を審議、講堂地区整備状況を視察

平成28年7月14日 平成28年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会

講堂地区整備案を審議

平成28年8月25日～平成28年11月30日

平成28年度史跡備前国分寺跡保存整備工事（第Ⅰ期第8年次）

平成29年2月9日 平成28年度第2回第二次山陽遺跡整備委員会

講堂地区整備案を審議、講堂地区整備状況を視察

平成29年3月18日 史跡備前国分寺跡講堂地区現地見学会

平成29年7月4日 平成29年度第1回第二次山陽遺跡整備委員会

北面回廊解説板の記載内容を審議

平成29年9月1日～平成29年10月31日

史跡備前国分寺跡北面回廊解説板製作設置業務委託（第Ⅰ期第9年次）

第3章 保存整備事業の経過

1 事業の概要

事業費

保存整備事業の収支内訳は次のとおりである。

収入の部

単位：円

区分	国庫補助金	県費補助金	市一般財源	合計
平成21年度	3,275,000	1,091,000	2,188,202	6,554,202
平成22年度	3,144,000	1,048,000	2,099,294	6,291,294
平成23年度	3,150,000	1,050,000	2,147,772	6,347,772
平成24年度	2,316,000	772,000	1,684,390	4,772,390
平成25年度	4,867,000	1,622,000	3,468,224	9,957,224
平成26年度	4,100,000	1,366,000	2,997,035	8,463,035
平成27年度	4,065,000	1,355,000	2,830,347	8,250,347
平成28年度	4,694,000	1,564,000	3,130,269	9,388,269
平成29年度	8,660,000	2,886,000	5,774,072	17,320,072
合計	38,271,000	12,754,000	26,319,605	77,344,605

支出の部

単位：円

区分	主たる事業費					その他の経費	合計
	工事費		その他				
	工事請負費	設計・監理委託料	整備委員会経費	遺構調査費等	墳丘裾保存整備工事費等	需用費等	
平成21年度	5,859,000	493,500	147,020			54,682	6,554,202
平成22年度	5,103,000	430,500	129,780	625,738		2,276	6,291,294
平成23年度	3,402,000	346,500	165,020	2,429,321		4,931	6,347,772
平成24年度	1,970,850	262,500	136,620	2,397,807		4,613	4,772,390
平成25年度	5,350,800	430,500	115,160	4,055,754		5,010	9,957,224
平成26年度	5,410,800	432,000	127,860	2,486,550		5,825	8,463,035
平成27年度	5,222,880	421,200	126,690	2,474,611		4,966	8,250,347
平成28年度	5,022,000	427,680	151,520		3,780,000	7,069	9,388,269
平成29年度	486,000		110,370	724,132	15,994,800	4,770	17,320,072
合計	37,827,330	3,244,380	1,210,040	15,193,913	19,774,800	94,142	77,344,605

工事等の施工業者

設計・工事監理受託者	平成21～28年度	株式会社空間文化開発機構
工事請負者	平成21年度	株式会社備作建設
	平成22・25年度	有限会社山陽建設
	平成23・26・27年度	光陽建設有限会社
	平成24年度	久安造園土木
	平成28年度	株式会社リアル
	平成29年度	株式会社チヂキ（解説板製作設置）

2 年度別事業概要

平成21年度

国庫補助事業として第Ⅰ期保存整備工事に着手した。第1年次として塔地区から開始し、塔基壇立体表示を行った。

- ・現状変更許可 平成21年9月25日付け21委庁財第4の7013号
- ・保存整備工事
 - 準備工 伐木、既存看板撤去・移設、除草、進入取付工、既設灯籠・地蔵撤去・移設
 - 遺構整備工 バックホウ積込、タイヤローラ締固、購入土、機械築立整形工、縁石、枕木階段2か所、礎石表示12基、ロープ木柵、舗装止め、張芝工、路盤工、ベンチ1基
 - 工期 平成21年10月30日～平成22年2月28日
- ・工事監理
 - 委託期間 平成21年10月29日～平成22年2月28日

平成22年度

第Ⅰ期保存整備工事第2年次として、昨年度に引き続き塔基壇立体表示を施工した。塔地区が終了したため、講堂地区の一部について基盤造成工事を開始した。また、平成18～20年度まで実施した第4～6次発掘調査成果報告書を作成した。

- ・現状変更許可 平成22年9月17日付け22受庁財第4号の768
平成23年1月21日付け22受庁財第4号の1659
- ・保存整備工事
 - 準備工 除草、暗渠排水管
 - 基盤造成工 ブルドーザ掘削押土、土の敷均・締固、購入土
 - 遺構整備工 礎石表示4基、真砂土舗装
 - 学習施設工 解説板1基
 - 工期 平成22年11月11日～平成23年3月18日
- ・工事監理
 - 委託期間 平成22年10月28日～平成23年3月18日

平成23年度

第Ⅰ期保存整備工事第3年次として、昨年度に引き続き講堂地区の基盤造成工事を施工した。保存整備事業に伴う第7次発掘調査を実施し、僧房基壇の資料を収集した。

- ・現状変更許可 平成23年7月15日付け23受庁財第4号の396
- ・保存整備工事
 - 準備工 除草、小堂移設、礎石引き上げ
 - 基盤造成工 バックホウ掘削積込、ブルドーザ掘削押土、タイヤローラ締固、購入土
 - 工期 平成23年10月25日～平成24年2月29日
- ・工事監理
 - 委託期間 平成23年10月25日～平成24年2月29日

平成24年度

第Ⅰ期保存整備工事第4年次として、昨年度造成した基盤上に講堂基壇立体表示を施工した。保存整備事業に伴う第8次発掘調査を実施し、僧房基壇及び西面回廊の資料を収集した。

- ・現状変更許可 平成24年7月20日付け24受庁財第4号の564
- ・保存整備工事
 - 雨水排水工 暗渠排水管
 - 遺構整備工 バックホウ掘削積込、タイヤローラ締固、購入土、機械築立整形工、路盤工、舗装止め、張芝工
- 工期 平成24年11月21日～平成25年2月28日
- ・工事監理
- 委託期間 平成24年11月21日～平成25年2月28日

平成25年度

第Ⅰ期保存整備工事第5年次として、昨年度に引き続き講堂基壇立体表示を施工した。また、保存整備事業に伴う第7・8次発掘調査の遺物等整理作業を行った。隣接する両宮山古墳の墳丘裾保存整備工事に伴う発掘調査を開始した（第4次調査）。

- ・現状変更許可 平成25年5月17日付け25受庁財第4号の107
- ・保存整備工事
 - 遺構整備工 バックホウ掘削積込、タイヤローラ締固、購入土、機械築立整形工、縁石、枕木階段4か所、舗装止め、路盤工、張芝工、礎石表示（遺構石）4基、礎石表示（購入石）8基
- 工期 平成25年7月31日～平成25年12月20日
- ・工事監理
- 委託期間 平成25年7月25日～平成25年12月20日

平成26年度

第Ⅰ期保存整備工事第6年次として、昨年度に引き続き講堂基壇立体表示を施工した。また、保存整備事業に伴う第7・8次発掘調査報告書を刊行した。隣接する両宮山古墳の墳丘裾保存整備工事に伴う第5次発掘調査を実施した。

- ・現状変更許可 平成26年6月20日付け26受庁財第4号の185
- ・保存整備工事
 - 遺構整備工 路盤工、礎石表示（講堂）24基、礎石表示（回廊）12基、真砂土舗装
- 工期 平成26年7月22日～平成26年11月28日
- ・工事監理
- 委託期間 平成26年7月22日～平成26年11月28日

平成27年度

第Ⅰ期保存整備工事第7年次として、昨年度に引き続き講堂基壇立体表示を施工した。また、隣接する両宮山古墳の墳丘裾保存整備工事に伴う第6次発掘調査を実施した。

- ・現状変更許可 平成27年6月19日付け27受庁財第4号の210
- ・保存整備工事

遺構整備工	真砂土舗装
工期	平成27年8月21日～平成27年11月30日
・設計監理	
委託期間	平成27年6月2日～平成27年11月30日

平成28年度

第Ⅰ期保存整備工事第8年次として、昨年度に引き続き講堂基壇立体表示を施工し、北面回廊解説板1基の施工を残して講堂地区の保存整備が完了した。また、隣接する両宮山古墳の墳丘裾保存整備工事に伴う第4～6次発掘調査の遺物等整理作業を行い、保存整備工事基本設計を策定した。

- ・現状変更許可 平成28年7月15日付け28受庁財第4号の450
- ・保存整備工事

遺構整備工	不陸整正、真砂土舗装、雨落溝表示
学習施設工	解説板（講堂）1基
雨水排水工	暗渠排水管
工期	平成28年8月25日～平成28年11月30日
- ・設計監理
- 委託期間 平成28年6月1日～平成28年11月30日

平成29年度

第Ⅰ期第9年次として、昨年度に施工完了した講堂地区に北面回廊解説板1基を製作設置し、講堂地区の保存整備がすべて完了した。また、隣接する両宮山古墳の墳丘裾保存整備工事に伴う第4～6次発掘調査報告書を刊行し、墳丘裾保存整備工事に着手した。

- ・現状変更許可 平成29年6月16日付け29受庁財第4号の256
- ・解説板製作設置 解説板（回廊）1基
- 委託期間 平成29年9月1日～平成29年10月31日

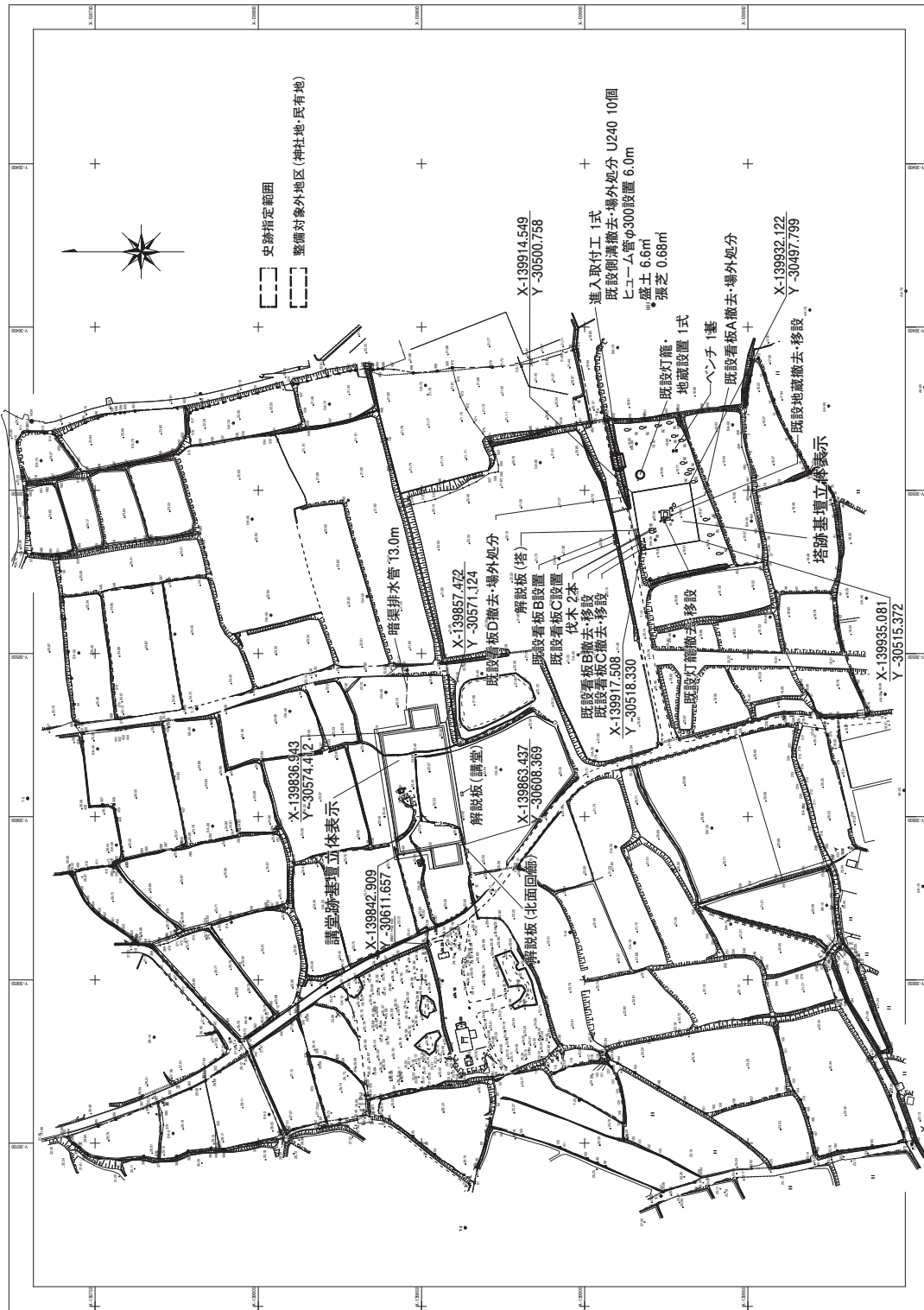


図9 施設配置図 (1/2,000)

第4章 保存整備事業の概要

1 塔地区

塔地区は、平成21～22年度に保存整備事業を実施した。第二次山陽遺跡整備委員会の指導のもと策定した設計案は次のとおりである。

準備工

- ・基壇範囲内（基壇西北部）にある榎木は（図版3-1）、伐木のうえ防腐処理を行う。文化庁から伐木が望ましいという指導を受け地元と協議し、地元からは来歴のある樹木でないとの意見で伐木の了解を得た。

表6 塔地区の整備概要

工種	内容	材質	数量
準備工	伐木		1 式
	既設看板撤去・移設		1 式
	除草		1,300 ㎡
	進入路取付工		1 式
	既設灯籠・地蔵撤去、移設		1 式
遺構整備工	バックホウ積込		184 ㎡
	タイヤローラ締固		184 ㎡
	購入土	真砂土	114.4 ㎡
	機械築立（土羽）整形工		65.6 ㎡
	縁石	花崗岩サビ系	56.9 m
	枕木階段1 3段（北）	杉	1 箇所
	枕木階段2 5段（南）	杉	1 箇所
	礎石表示	花崗岩白系	16 基
	ロープ木柵	杉丸太、ランバーロープ	18 m
	舗装止め		60 m
	張芝工 芝串無	ひめの	31 ㎡
	張芝工 芝串有	ひめの	65.6 ㎡
	路盤工	RC-40	213.7 ㎡
	真砂土舗装	スーパーガンコマサ	213.7 ㎡
	ベンチ	杉	1 基
学習施設工	解説板 パネル面900×600mm	ハードコートパネル ステンレス	1 基

- ・石造七重層塔の南に置かれていた地蔵と、西に置かれていた灯籠は地元との協議のうえ、基壇の北東外に移設する。

遺構整備工

- ・心礎は、発掘調査により原位置をほぼ保っていることが判明したため、現状のまま露出展示する。
- ・石造七重層塔は、心礎上に現状のまま置く。周囲に安全柵（ロープ木柵）を設けて保護するとともに見学者の安全を図る。奈良時代の復元塔基壇上に、鎌倉時代の石造七重層塔が建つことについては慎重な検討を行ったが、備前国分寺跡の現代までの歴史的経過を物語る物証ととらえ、その場に残すこととなった。
- ・心礎を露出展示することにしたため、心礎上面標高20.9mを基準に心礎を20cm露出させ、基壇の整備上面標高をFH=20.7mとした。残存する最も高い基壇上面標高は19.74mで、整備前の地表面下には真砂土が厚さ40～60cm盛られており、整備前の時点で既に遺構の保存は図られているため、基盤造成は行わなかった。整備前の地表面に、基壇の盛土を施すことで遺構整備を進めた。
- ・整備前の地表面から整備上面標高FH=20.7mまでを盛土して基壇としたため、整備による基壇高は南面で90cm、北面で60cmとなった。発掘調査で得られた推定基壇高1.2～1.8mより低いが、心礎を現状で露出展示することを優先した結果である。基壇上面標高FH=20.7m、礎石上面標高FH=20.8mとし、心礎以外の礎石は10cmの露出となる。
- ・発掘調査で判明した基壇規模60尺（17.82m）は、幅12cmの縁石で表示し、そこから法面を立ち上げた。
- ・基壇外装は発掘調査で確認できていないので、基壇は法面をもつ張芝で表現する。張芝に使用する芝は、省管理型の「ひめの」を採用する。
- ・礎石は、心礎以外は根石を残してすべて失われているため、四天柱及び側柱の16基の模擬礎石を置く。模擬礎石は、一般流通材として入手可能な中国産花崗岩白系とする。
- ・基壇上面は景観に配慮し、真砂土舗装とする。
- ・階段は創建当初のものは検出していないが、後世に造られた登壇のための構造物が南面中央で確認

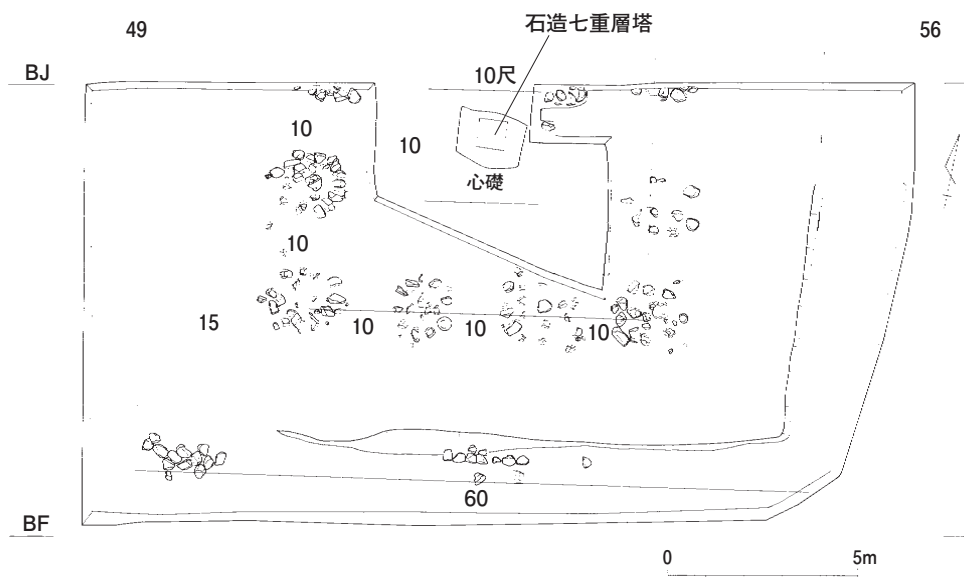
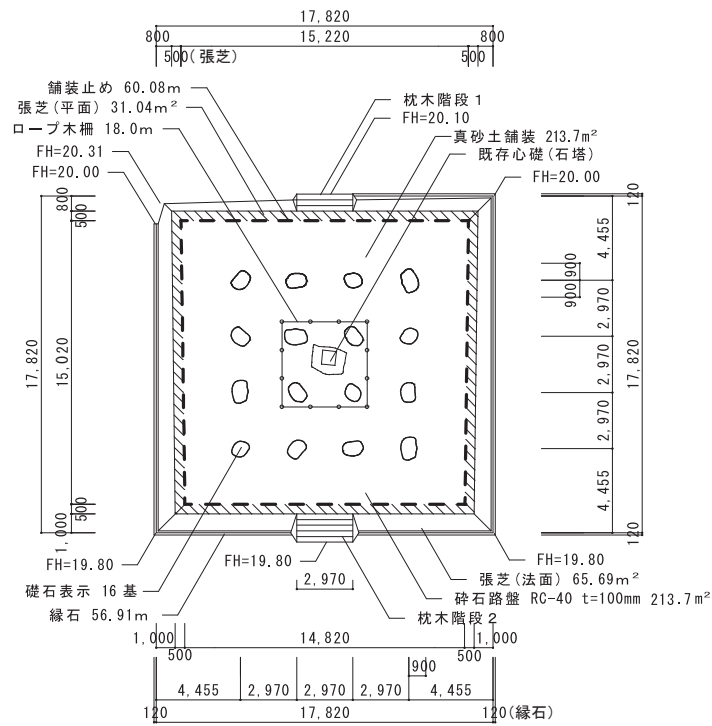


図10 塔調査区 発掘調査遺構図（平成16年度調査・1/200）

された。これを登壇施設と積極的に解釈したうえで、整備基壇への登壇用の階段を設置することとした。階段は、検出された南面だけでなく、北面にも設置することとした。景観への配慮・補修の容易さを考慮して枕木階段とし、素材は杉材で防腐処理を施す。階段の長さは発掘調査では判明しなかったが、南面中央で認められたことから、中央間1間分2.97mとした。基壇縁は法面とせざるを得なかったが、本来そうであるように、階段は基壇より外側に突出させた。

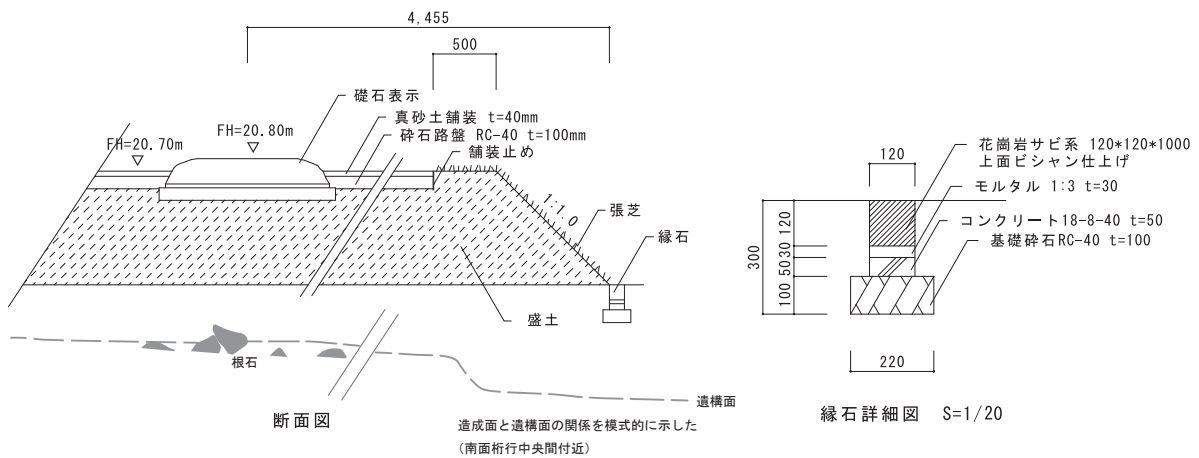
学習施設工

- ・解説板は当面市道からの動線を考え北側に設置し、耐久性・経済性を考慮し、ハードコートパネルとする。



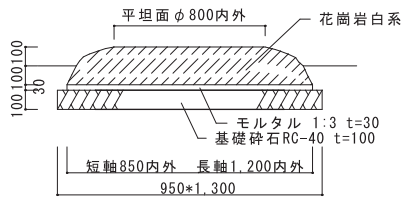
平面図

塔跡基壇立体表示 S=1/400

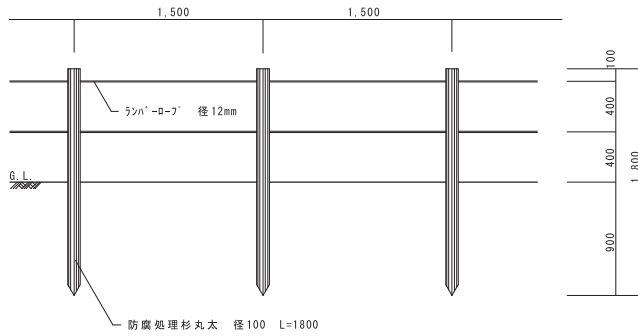


基壇立体表示詳細図 S=1/60

図11 塔地区 整備詳細図1

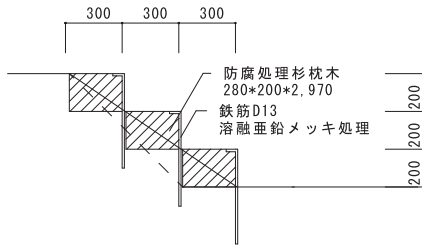


塔跡礎石表示詳細図 S=1/40

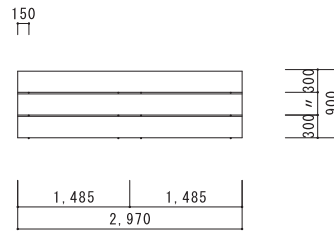


ロ-フ木柵詳細図 S=1/60

木部は木材保存剤^ハンキ⁷EC030により、加圧注入処理を行うこと。

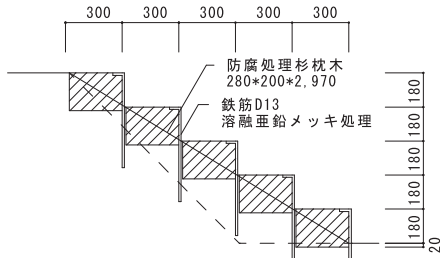


断面図 S=1/40

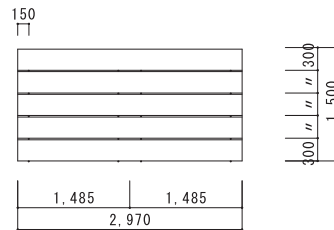


平面図 S=1/100

枕木階段1詳細図



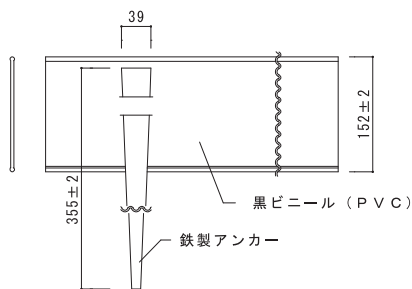
断面図 S=1/40



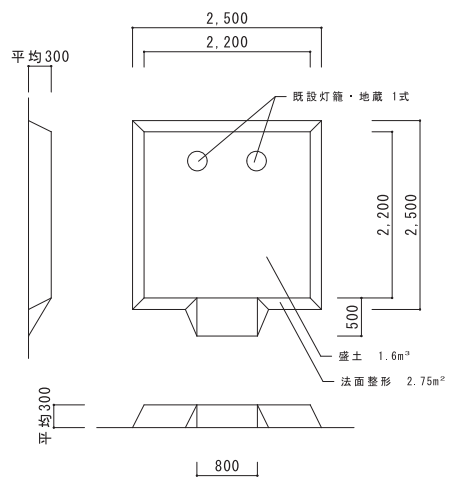
平面図 S=1/100

枕木階段2詳細図

木部は木材保存剤^ハンキ⁷EC030により、加圧注入処理を行うこと。

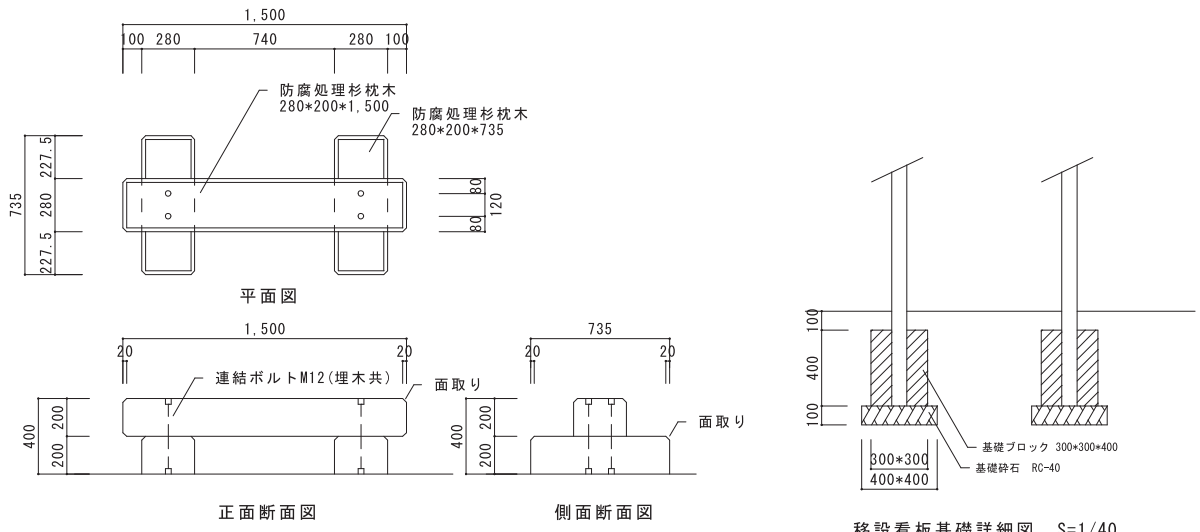


舗装止め詳細図 S=1/10

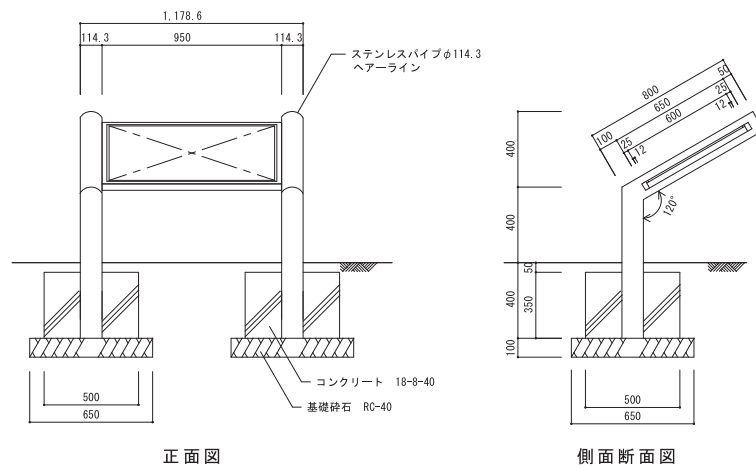
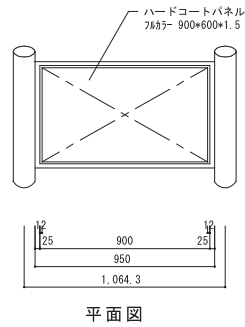


既設灯籠・地蔵設置 S=1/100

図12 塔地区 整備詳細図2



ベンチ詳細図 S=1/40



解説板詳細図 S=1/40

図13 塔地区 整備詳細図3

とう 塔

塔は、国分寺を象徴する建物です。しよくにほんぎ『続日本紀』によると、その塔は七重塔で、中に鎮護国家を説いた經典を納め記っていました。


建物は一辺8.91m(30尺)、高さ60m程度と想定され、一辺17.82m(60尺)の正方形の基礎きだん(基壇)の上に建てられていました。

礎石は心柱を支えた心礎以外はすでになくなっていましたが、その下に置かれた根石によってその配置がわかりました。基壇の側面を飾る石材等(基壇外装)は発見されず、階段も確認できませんでした。建物は平安時代のうちに失われたと考えられます。


この塔の基壇は発掘調査成果から復元したもので、心礎は奈良時代から残る実物をそのまま残し、他は礎石位置に模擬礎石を置いています。基壇外装は不明のため設けず、土が流れないように法面(のりめん)に芝を張りました。木製の階段は復元基壇に登るために設置したものです。

【石造七重塔】 赤磐市指定文化財：建造物 平成2年3月20日指定

心礎上につた花崗岩製の層塔で、鎌倉時代後期の作といわれています。現在相輪が失われ、かわりに球形の石を置いています。本来の木造七重塔がなくなった後に建てられたものですが、塔の所在を示す貴重な石造物です。



▲塔基壇の発掘調査状況(南東から)
心礎を中心に根石が並び、基壇周囲に瓦片が堆積していました。心礎は元の位置からやや移動しているようです。



赤磐市教育委員会
平成23年3月

図14 塔の解説板

2 講堂地区

講堂地区は基盤整備を含め、平成22～29年度に施工した。第二次山陽遺跡整備委員会の指導のもと、以下のとおり設計案を作成した。なお、基本設計においては後述する薬師堂及び塚状の高まりを活かし、礎石表示を行わない基壇立体表示を計画していたが、実施設計段階で薬師堂を移設し、建物規模を明示することを目的に礎石表示を実施することとした。

準備工

- ・整備着手前、基壇中央北側に薬師堂という小堂が、北面西回廊北側に荒神様という小祠が鎮座していた(図版5-1)。この2つの建物は、基本設計段階では移設を考えていなかったが、基壇範囲及びそれに近接するため、実施設計時に地元と協議して移設することとした。移設場所は、現在地から離れない、お参りしやすい場所を地元と協議して決定した。具体的には、基壇の西外で、国分寺八幡宮の東である。もともと薬師堂及び荒神様の建っていた官有地2筆は財務省から購入した。

基盤造成工

- ・薬師堂のすぐ西には後世に瓦や礫を集積した塚状の高まりがあり、周囲の地表面より40cmほど高かった(図版8-1)。基本設計段階では薬師堂をそのまま残すとこの高まりも残すことにせざるを得なかったが、実施設計によって塚状の高まりの上部が礎石表示に支障となることが明らかになったため、その上部を発掘調査した。調査内容は後述する。調査の結果、基壇と時期が異なる新しいものであったため、上部40cm程度の記録をとり、支障のない下部は基壇下にそのまま埋め残すこととした。

表7 講堂地区の整備概要

工種	内容	材質	数量
準備工	除草		2,775 m ²
	暗渠排水管	波状管	19 m
	小堂移設		1 式
	礎石引き上げ		1 式
基盤造成工	バックホウ掘削積込		81 m ³
	ブルドーザ掘削押土 地山		49 m ³
	ブルドーザ掘削押土 ルーズ		775 m ³
	タイヤローラ締固		775 m ³
	購入土	真砂土	715 m ³
雨水排水工	暗渠排水管	波状管 径20cm	73 m
	暗渠排水管		13 m
遺構整備工	バックホウ掘削積込		359 m ³
	タイヤローラ締固		359 m ³
	購入土	真砂土	399 m ³
	機械築立（土羽）整形工		110 m ²
	路盤工	RC-40	699 m ²
	舗装止め		147 m
	張芝工 芝串無	野芝	75 m ²
	張芝工 芝串有	野芝	91 m ²
	縁石	擬石	113 m
	枕木階段1 2段（北）	杉	1 箇所
	枕木階段2 4段（南）	杉	1 箇所
	枕木階段3 1段（東西）	杉	2 箇所
	礎石表示（遺構石）		4 基
	礎石表示（購入石） 講堂	花崗岩白系	32 基
	礎石表示（購入石） 回廊	花崗岩白系	12 基
	真砂土舗装	スーパーガンコマサ	695.3 m ²
	不陸整正		228 m ²
	雨落溝表示		70 m
学習施設工	解説板（講堂） パネル面 900×600mm	ハードコートパネル ステンレス	1 基
	解説板（回廊） パネル面 750×500mm	ハードコートパネル ステンレス	1 基

- ・ 基盤造成は、遺構に影響が出ないと想定される遺構面+90cmとし、地表面からの盛土厚が数十cm確保できない範囲は、耕作土をすきとり、真砂土に入れ替えた。

遺構整備工

- ・ 発掘調査成果から北面西回廊には原位置を保つ礎石があるが、講堂の礎石には原位置を保つものがないため、盛土による遺構保存を図ったうえで、原則的には模擬礎石によって表示することとした。
- ・ 礎石の表示は型取りによる FRP 製も検討したが、劣化が進むことに懸念があり、自然石を選択することとした。また、中国産の石材でなく、国産の自然石を検討したが、近隣に流通するものがないため、塔地区と同じ中国産花崗岩とせざるを得なかった。しかし、塔地区における中国産花崗岩の画一的な加工による礎石の反省から、発掘調査で出土した本物の礎石を用いる方法を実施設計段階で検討した。それにより、礎石落込穴や水田の畦畔に二次的に動かされた礎石計4基を用いて礎石位置に配置することとした。具体的には、礎石21-a、30、31と薬師堂西の塚状の高まりから検出した礎石である。
- ・ 礎石は出土礎石4基以外は入手可能な中国産花崗岩白系とした。これにより出土礎石と模擬礎石の違いが明瞭になった。
- ・ 遺構が検出された北側の雨落溝を真砂土舗装により表示する。
- ・ 階段の痕跡は講堂基壇南辺中央間で南への張り出しを確認したのみであるが、整備基壇へ上がることを考慮し、枕木階段を南面及び北面の桁行中央間1間分5.049mに設置する。
- ・ 回廊が東西に続いていくことを表示するため、各1間分の礎石を配置し東西延長6mとする。
- ・ 整備が長期化しており、経済性の観点から、芝を塔地区で使用した「ひめの」から野芝へ、縁石を花崗岩サビ系から擬石へと変更する。
- ・ 講堂の整備基壇高は、発掘調査で推定された基壇高を参考に南面で80cm、北面で35cmとし、基壇上面標高FH=23.75m、礎石上面標高FH=23.85mとした。北面回廊については、基壇上面標高FH=23.45m、礎石上面標高FH=23.50mとした。したがって、講堂の礎石は10cm、回廊の礎石は5cmの露出となる。
- ・ 整備する講堂基壇上面標高FH=23.75m、回廊基壇上面標高FH=23.45mで、講堂と回廊の整備基壇には30cmの段差がある。その境界に高さ15cmの枕木階段1段を設置する。階段とした理由は、講堂と回廊の取り付け部の遺構がスロープ状になっていなかったためである。階段の遺構も検出していないが、利用者の便宜を考慮して1段分の階段を設けることとした。また、景観に配慮し木製とした。複廊の棟通りは本来連子窓等で仕切られるため、階段中央に幅20cmの空間を設けた。

学習施設工

- ・ 解説板内に、本物の出土礎石4基を設置していることとその位置を示す。

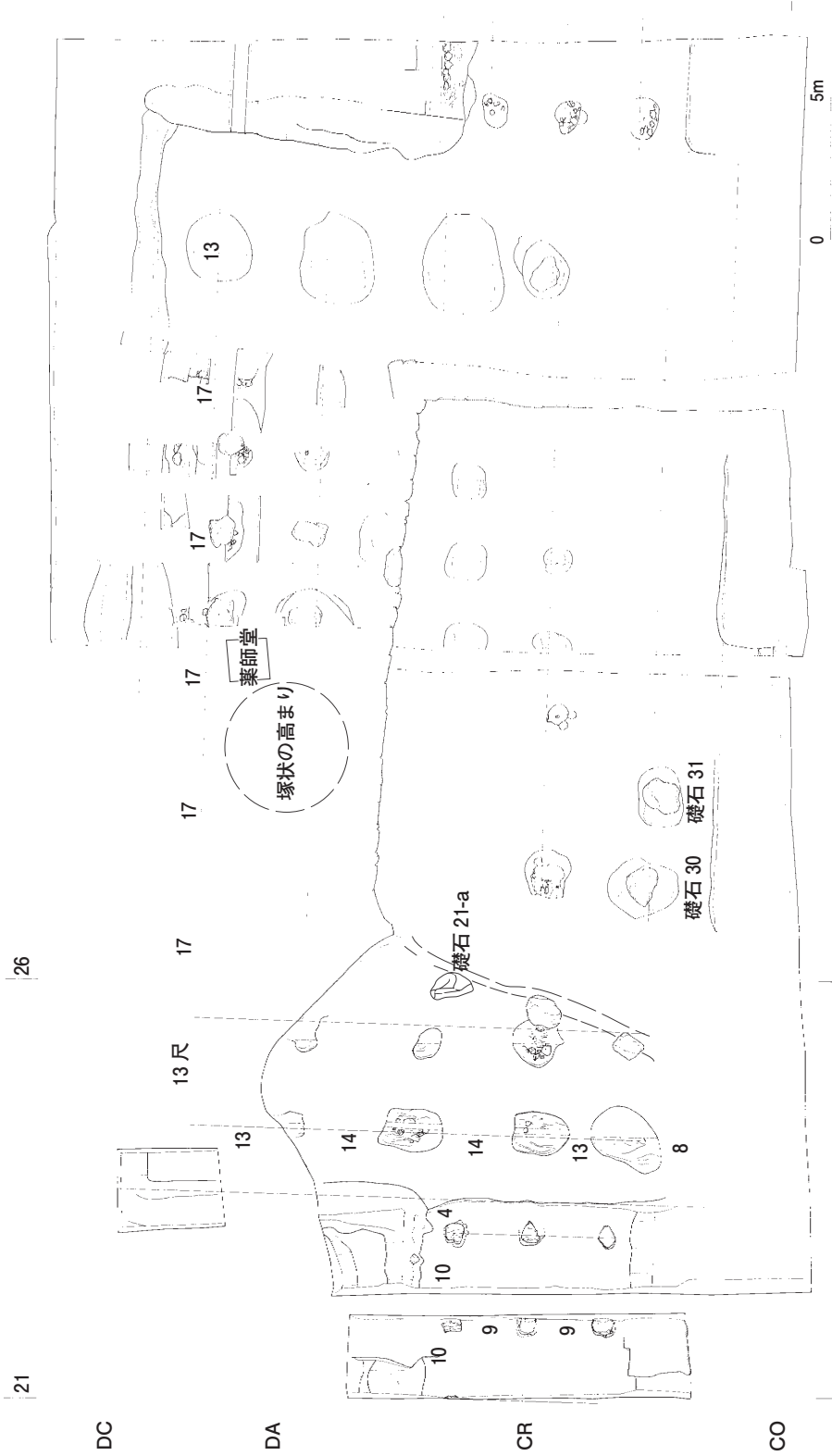


図15 講堂調査区 発掘調査遺構図 (平成15年度調査・1/250)



図16 講堂地区 造成平面図 (1/1,000)

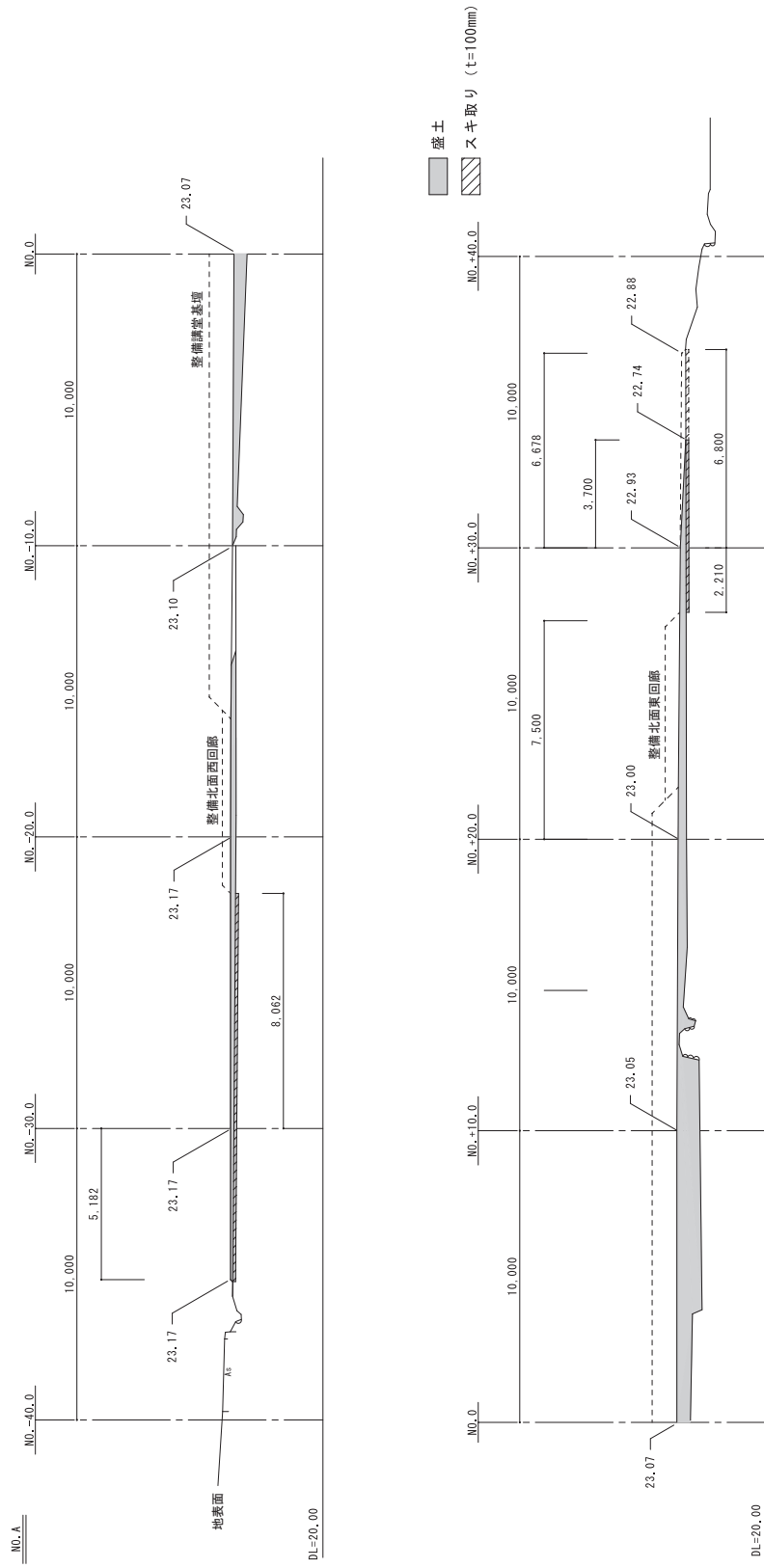


図17 講堂地区 基礎造成断面図 (No.A) (1/250)

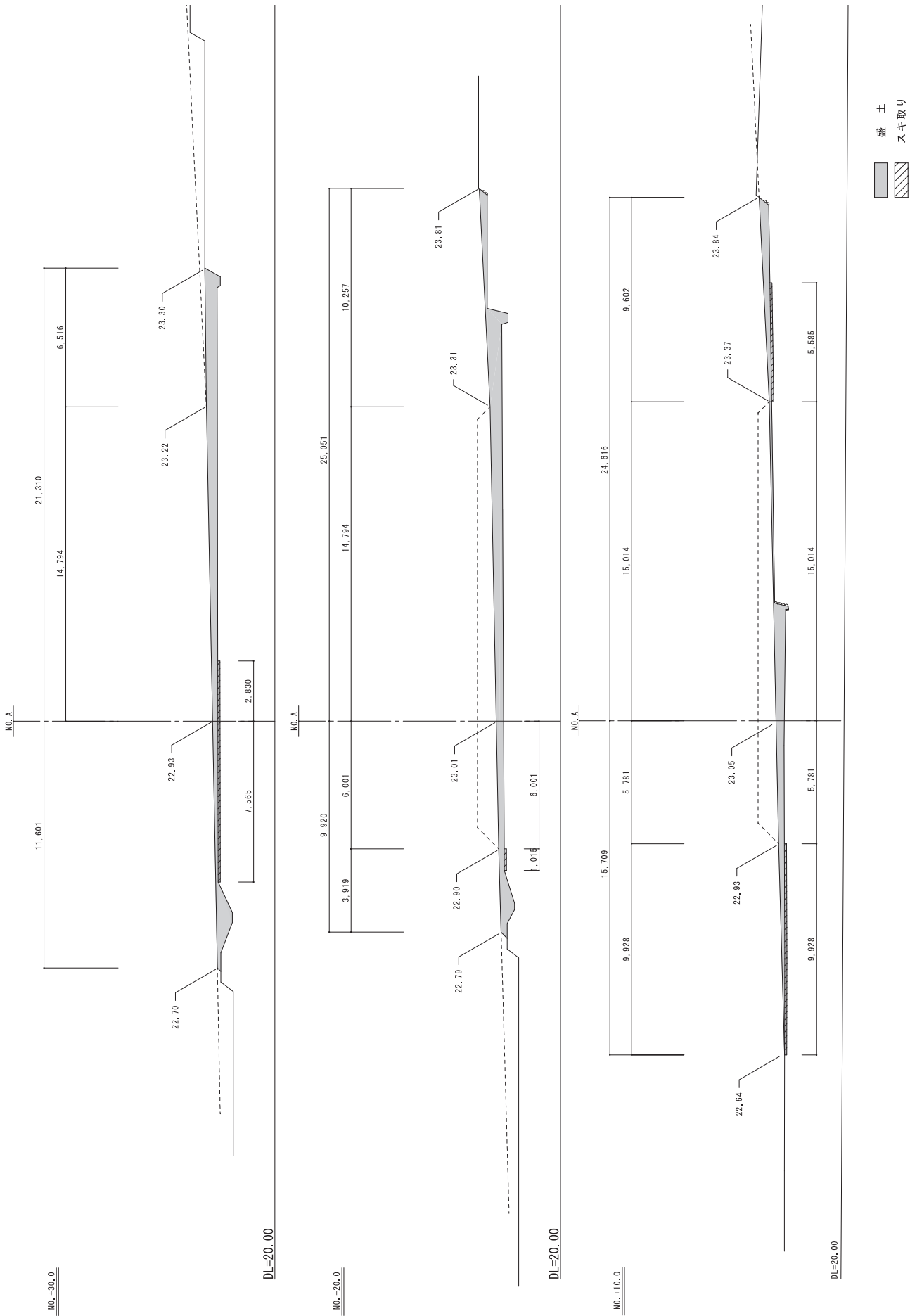


図18 講堂地区 基礎造成断面図 (No.+30~+10) (1/250)

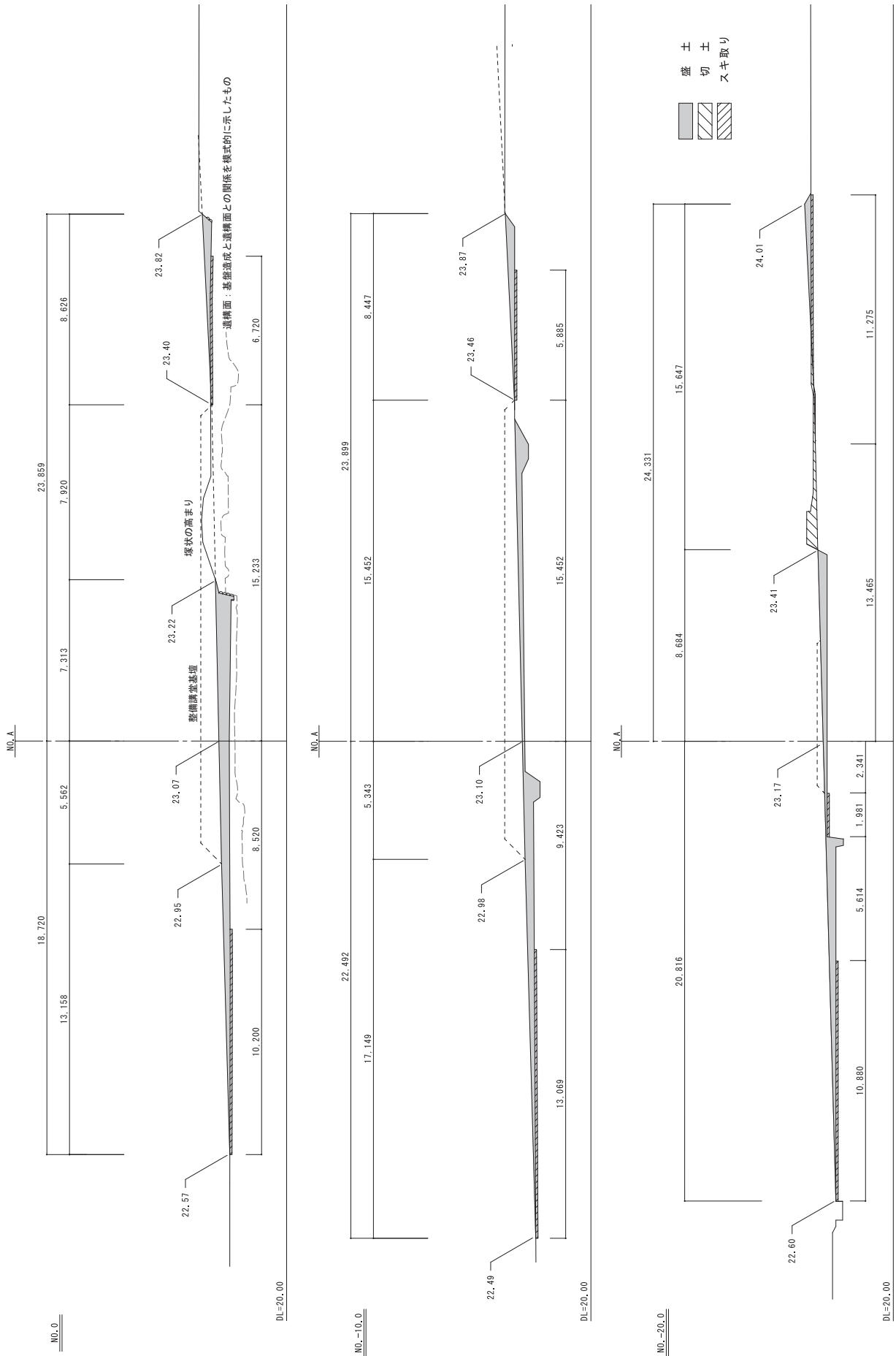


図19 講堂地区 基礎造成断面図 (No.0～20) (1/250)

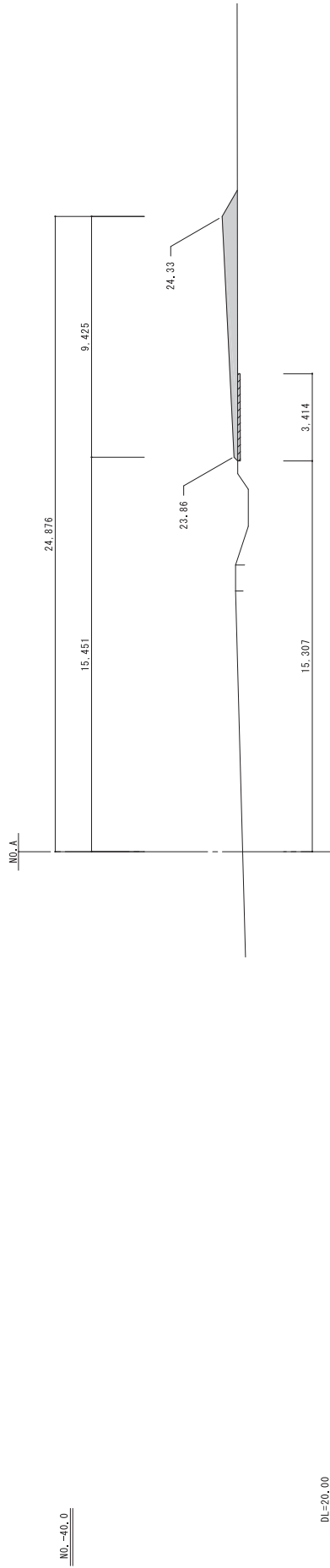
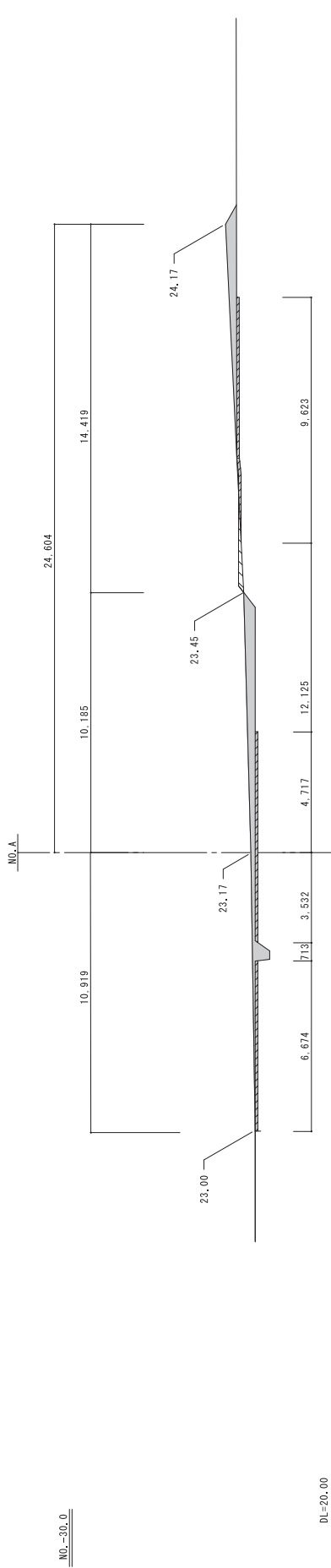
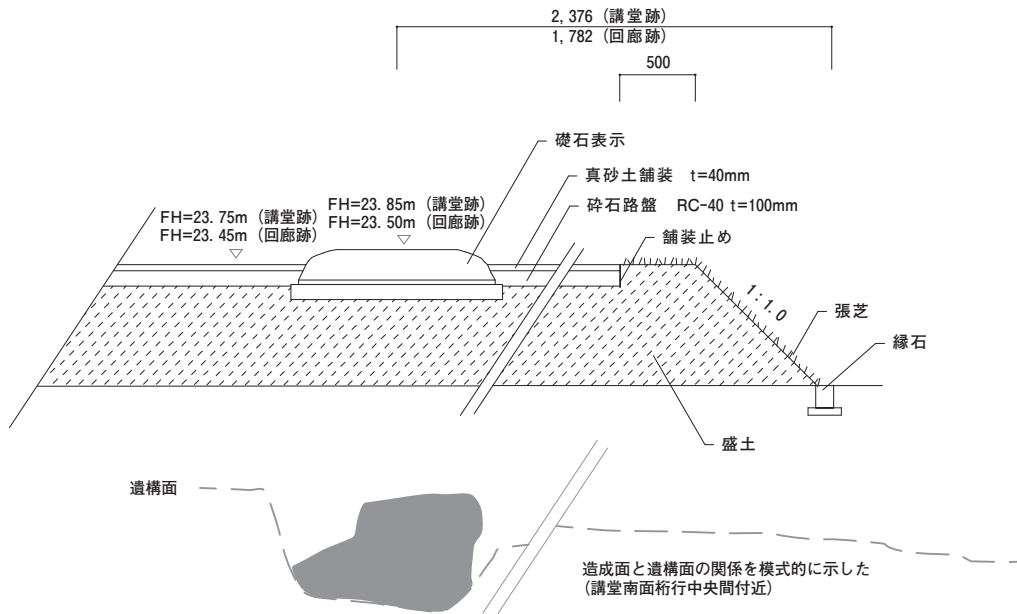
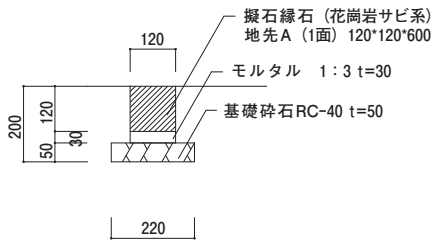


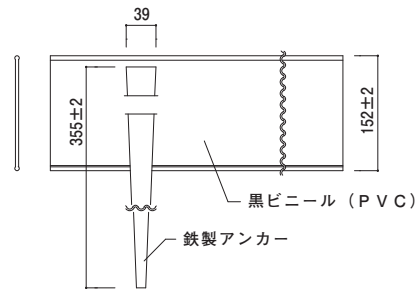
図20 講堂地区 基盤造成断面図 (No. 30～40) (1/250)



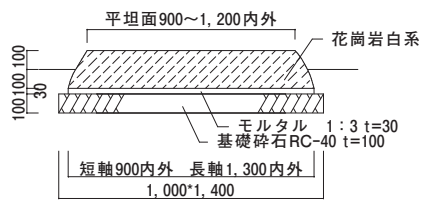
断面図 S=1/50



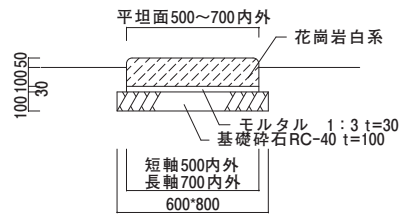
縁石詳細図 S=1/20



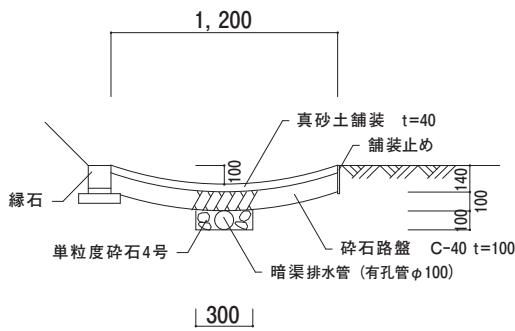
舗装止め詳細図 S=1/10



講堂跡礎石表示詳細図 S=1/40

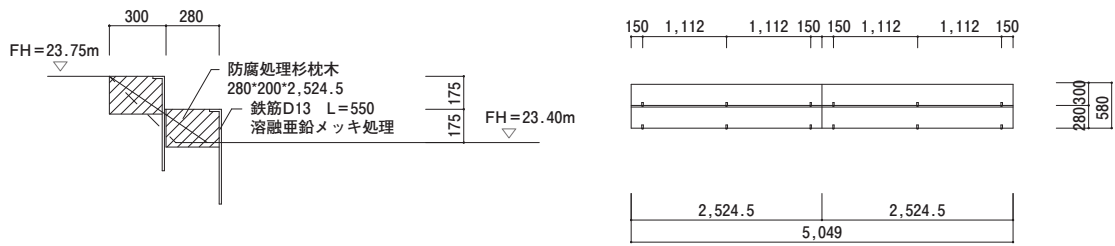


回廊跡礎石表示詳細図 S=1/40



雨落溝表示詳細図 S=1/40

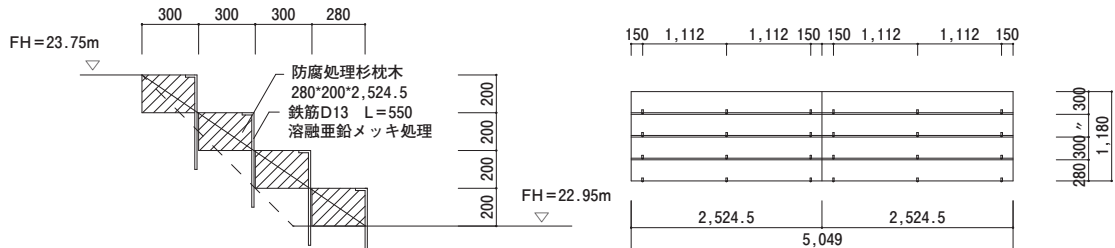
図22 講堂地区 整備詳細図2



断面図 S=1/40

平面図 S=1/100

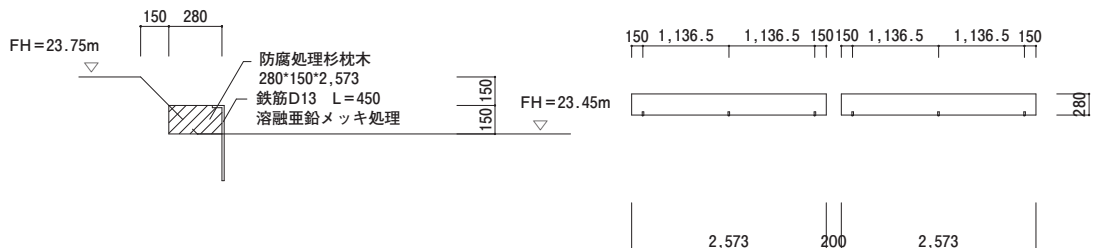
枕木階段1詳細図



断面図 S=1/40

平面図 S=1/100

枕木階段2詳細図



断面図 S=1/40

平面図 S=1/100

枕木階段3詳細図

木部は木材保存剤ペンタキュアECO30により、加圧注入処理を行うこと。

図23 講堂地区 整備詳細図3

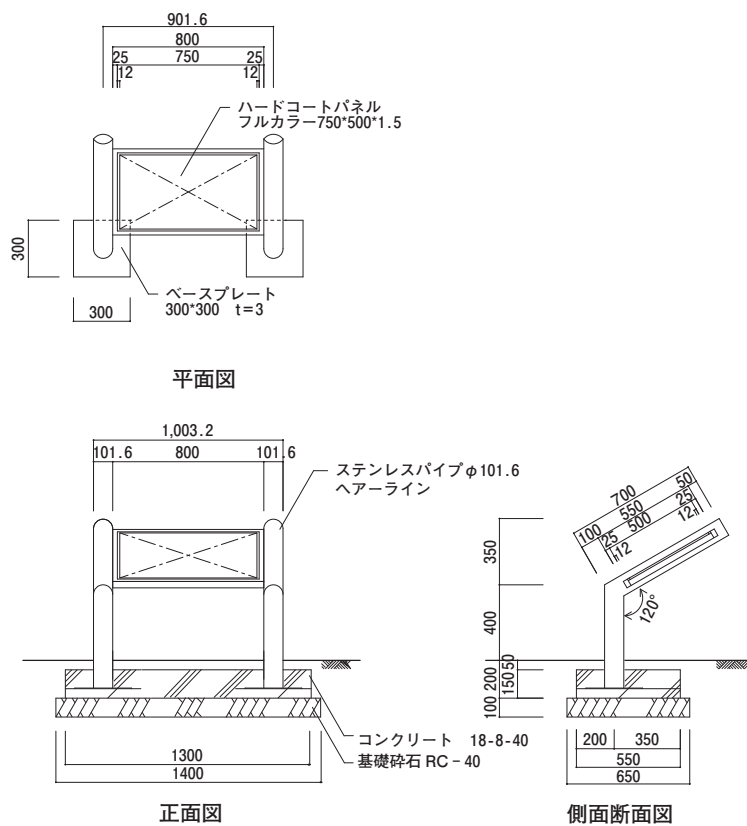
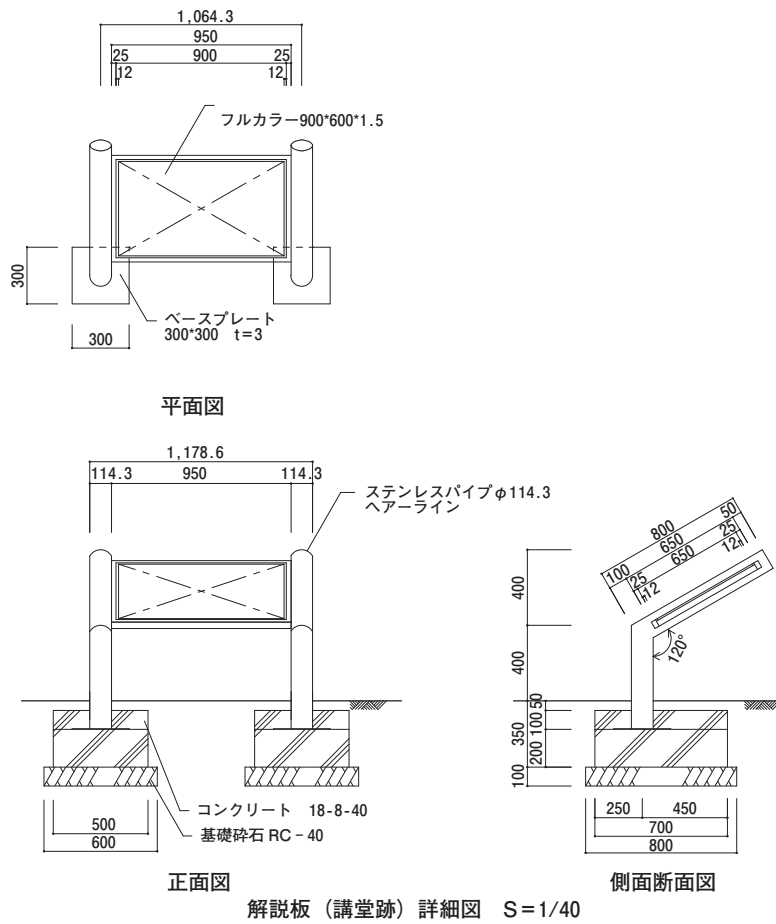


図24 講堂地区 整備詳細図4

こう どう 講 堂


講堂は、お坊さんが日常的に行事を行い、経典が講義された建物です。金堂の北方に建てられていました。

奈良時代の講堂は正面7間(33.0m・111尺)、奥行4間(16.0m・54尺)と想定され、東西37.7m(127尺)、南北20.8m(70尺)の長方形の基礎(基壇)の上に建てられていました。

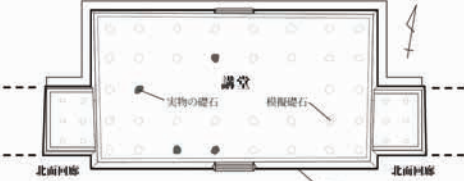
柱を支えた礎石はほとんどが抜き取られ、一部が地中に大穴を掘って落としこまれていました。基壇の両側面には回廊(屋根付きの廊下)が接続することがわかりました。

建物は平安時代の終わり頃に火災で焼失しますが、鎌倉時代には規模を小さくして再建されました。


この基壇は発掘調査成果から奈良時代創建当初の規模がわかるように整備したものです。大穴に落としこまれていたり、水田の畦によせられたりしていた実物の礎石4個を引き上げ柱位置に据え、他の32個は模擬礎石を置いています。基壇の側面を覆う石材等(基壇外装)は不明のため設けず、土が流れないように法面に芝を張りました。階段の痕跡が残っていた正面中央に木製の階段を設置しています。



▲ 講堂の発掘調査(南西から、平成15年度)
写真内の講堂基壇後方にある薬師堂は整備にともない基壇外に移設しています。



▲ 講堂の整備基壇平面図
黒塗りの礎石4個は、地中に落としこまれていた実物の礎石(流紋岩)です。他は模擬礎石(花崗岩)を置いています。基壇外装が不明のため、基壇の大きさは周囲の緑石で表示しています。



▲ 講堂の想像図

赤磐市教育委員会 平成28年11月

図25 講堂の解説板

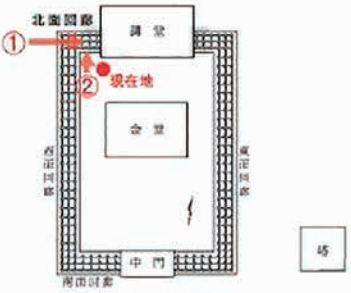
ほくめんかいろう 北面回廊 North Corridor

回廊は、屋根のある通路(廊下)です。右の図のように金堂を囲むように中門から講堂へ接続し、伽藍の中心部を長方形に区画しています。


北面回廊は、講堂をはさんで東西68.6m(231尺)の長さがあります。幅は5.4mで梁行の礎石が3個並んでいることから、中央に壁がありその両側が通路となります。このような構造の回廊は、通路が1本の単廊に対して、複廊と呼ばれます。

発掘調査では、火災による建物の崩壊によって真かれていた屋根瓦がそのまま落下した状態で見つかっています(写真②)。平安時代の終わり頃(12世紀中頃～後半)に講堂とともに火災で焼失してしまったようです。


整備しているのは、講堂に接続する東西各1間分の基壇(基礎)で、柱の位置には模擬礎石を置いています。実際の基壇はさらに東西に延びて南に折れ、中門へつながります。



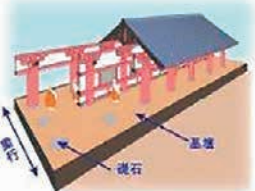
▲ 伽藍復元図
*番号は写真の撮影位置を示しています。



① 北面回廊(西側)と講堂の接続部(南から、平成15(2005)年度調査)
北面回廊の奥行の礎石が3個並んでいます。



② 落下した屋根瓦(南から、平成16(2004)年度調査)
丸瓦と平瓦が交互に並んでいます。



▲ 回廊(複廊)の模式図

赤磐市教育委員会 平成29(2017)年10月

図26 北面回廊の解説板

3 礎石の表示と塚状の高まりの調査 (図27・28、図版8)

第1次調査(平成15年度)において、基壇上面から講堂創建時に用いたと考えられる礎石を6基検出した。これらの礎石は、いずれも後世に二次的に動かされたと考えられ、原位置をとどめるものはなかった。ところが、残存する礎石の抜取穴や落込穴の状況から、柱位置や建物規模を復元することができた。基本設計段階では、先述のように薬師堂をそのまま残すと考えていたことも相まって、これらの礎石を動かすことも困難であることから、礎石の表示を行うことは考えていなかった。しかし、先行していた塔地区の整備では心礎を除く礎石16基は模擬礎石で画一的な表示となってしまったことに懸念の声があがった。すなわち、このような整備では迫力が欠け、見学者へ訴える情報が少なくなってしまうと思われたのである。このため、講堂の整備では実施設計段階において原位置をとどめていない礎石を活用して遺構表示を行うこととした。具体的には、二次的に動かされ、遺構と遊離した礎石の中から、南側柱西よりで落込穴内の礎石2基(礎石30・31)と水田畦畔に寄せられた身舎西妻の礎石1基(礎石21-a)を引き上げ、礎石表示に使用することとした。礎石の引き上げは、平成15年度の講堂調査区を部分的に再発掘することで実施した。再発掘は講堂地区の保存整備工事と併行して行った第7次調査(平成23年度)で行い、礎石落込穴の下端と礎石の厚みを確認したうえで、礎石を引き上げた。調査の結果、礎石30・31は70~80cmの厚さがあることが判明した。

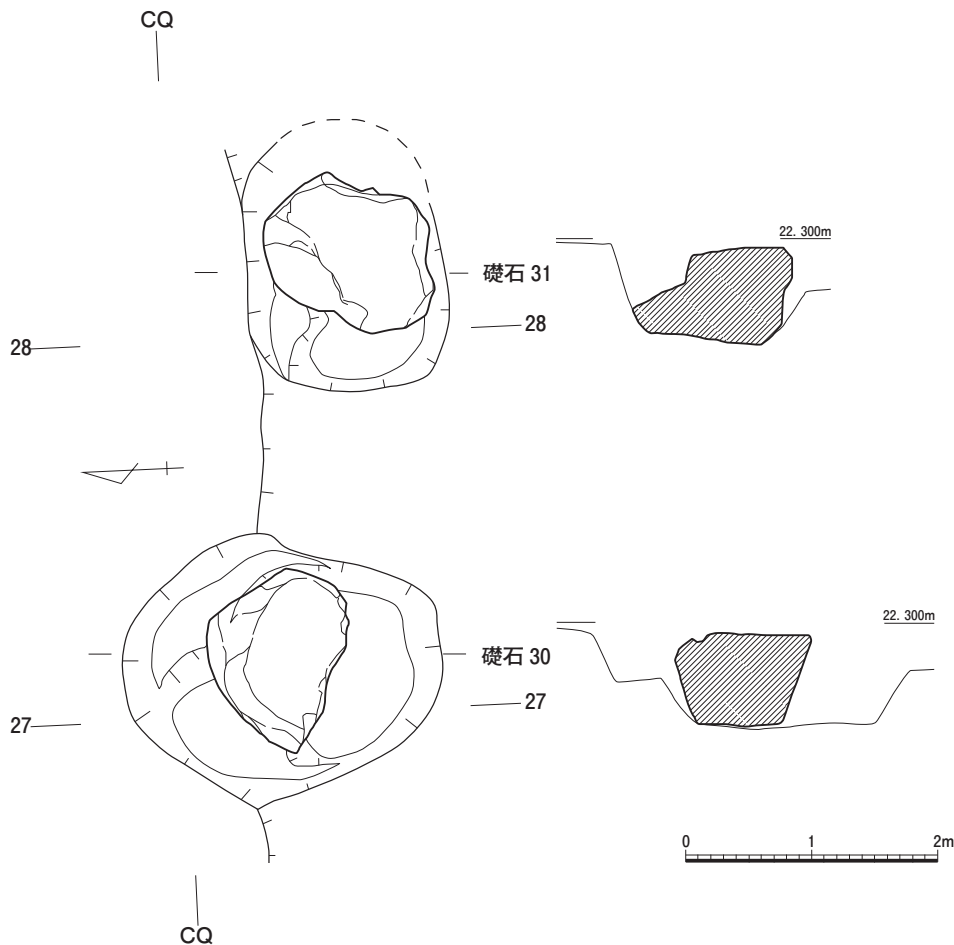


図27 講堂地区 礎石30・31 (1/60)

さらに、講堂中央北側には直径約4.5mの塚状に盛り上げられた瓦や礫の集積箇所があり、この高まりの上面標高は23.8～9mで周囲の地表面より40cm程高い。そのため、講堂整備基壇上面標高FH = 23.75m及び礎石表示の下面計画標高23.55mに対し、上部を削らないと基壇整備を収めることができないことが実施設計の段階で明らかになった。この塚状の高まりは後世に集積されたものであると考えられたため、標高23.4mより上部について発掘調査を実施し、生成要因を確認することとした。調査は、講堂地区の保存整備工事と併行して行った第7次調査で実施した。

調査は塚状の高まりに南北3.3m×東西20cmのトレンチを設定して行った。その結果、埋土は礫や瓦片を多く含み、ガラス瓶などの現代遺物を包含した、しまりの弱いものであった。また、高まりの中央において長軸1.2m、短軸75cm、厚さ40cmの礎石状の石材を検出した。この石材は平坦面を上にして置かれていた。また、その南には長軸50cm、短軸30cm、厚さ35cmの細長い石材を確認した。二つの石材の平面配置とともに、これらの石材が埋まっている高まりが現代に生成されたと判断されること、さらに東接して薬師堂が建てられていることから、この塚状の高まりには薬師堂以前の建物が建っていたと推定された。結果的には、塚状の高まりは遺構と直接関係がないと判断でき、発見された礎石大の石材1基を礎石表示として再利用することとした。

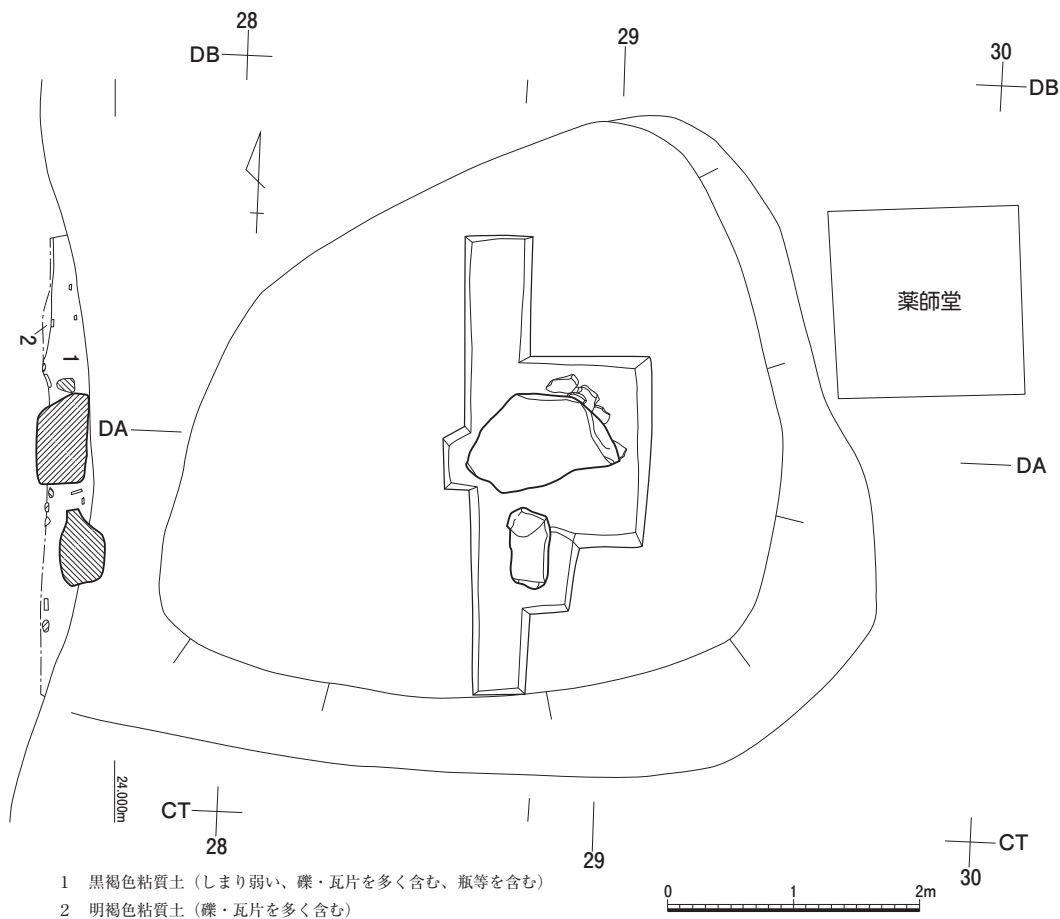


図28 講堂地区 塚状の高まり (1/60)

4 今後の整備に向けての課題

ここで、塔と講堂の2地区のこれまでの整備における課題を列挙し、次期に行う予定の備前国分寺跡の今後の整備につなげたいと考える。

- ・塔基壇北側の市道は供用のために残さざるを得なかったため、その道路敷により、基壇西北部の縁石や法面が復元的に表示できなかった。
- ・講堂地区を中心として模擬礎石の加工に使用したドリル痕が残り、古代らしさに欠ける仕上げとなった。また、模擬礎石は機械化されたような画一的な形状となっしまい、中国産の模擬礎石は加工指示が困難であることを再認識した。模擬礎石を用いる場合においても、最終の仕上げの方法を検討するとともに、国産材の利用とその加工についても検討したい。
- ・塔地区、講堂地区とも新補した模擬礎石には、設置年代などを刻印しなかった。奈良時代の礎石でないことを明確に示すためにも、それらの刻印は施した方がよかった。
- ・塔地区に生えていた榎木を伐採したことにより、史跡指定地内に唯一あった木陰がなくなってしまった。史跡指定地内で休息場所を提供できるよう今後検討する。
- ・塔と講堂基壇の枕木階段の固定に鉄筋を使用したため、鉄筋が外観に露出してしまった。景観に配慮するために、鉄筋が見えないような固定法を検討する。
- ・解説板の文字数が多く難解になった感が否めない。平易な解説板の作成を目指す。

5 今後の計画

本書において平成21～29年度に第I期整備として行った塔地区及び講堂地区の整備報告を掲載したが、史跡指定地の整備は当初の計画の1/6も終了していない。国分寺の寺域一帯が保存できており、かつ隣接して巨大前方後円墳が立地するという全国でも数少ない好条件を活かして、未整備部分の整備を着実に進めていきたい。現在は両宮山古墳墳丘裾保存整備工事を緊急的に実施しているが、その終了後には僧房地区の整備に着手したい。今後の整備においては、前節で示した塔地区及び講堂地区の整備で生じた課題について、それを活かせるよう工夫していきたい。

また、整備を進めるにあたっては地元住民の理解が不可欠であり、図版9に示した活用事業を積極的に展開しているところであるが、今後もこのような活用事業による普及啓発が求められる。整備の長期化は避けられないが、時代に応じた事業展開を模索していきたいと考えている。



1 塔地区（北から）



2 塔地区（北東から）

図版2 講堂地区



1 講堂地区（南東から）



2 講堂地区（南西から）



1 塔地区 着手前（南から）



2 榎木伐木後（東から）



3 基壇盛土・縁石施工状況（南西から）



4 模擬礎石材料



5 模擬礎石施工状況（西から）



6 ロープ木柵設置状況（北東から）

図版4 塔地区 平成21・22年度



1 舗装止め施工状況（北から）



2 枕木階段2施工状況（南西から）



3 張芝施工状況（南東から）



4 碎石路盤工施工状況（北西から）



5 石灯籠・地藏移設状況（南から）



6 解説板設置状況（北から）



1 講堂地区 着手前 (南から)



2 暗渠排水管敷設状況 (東から)



3 暗渠排水管敷設状況 (南から)



4 礎石 (遺構石) 引き上げ (西から)



5 礎石 (遺構石) 仮置状況 (西から)



6 薬師堂・荒神様移設状況 (南から)

図版6 講堂地区 平成22～29年度



1 基盤造成盛土（南から）



2 基盤造成完了状況（南から）



3 縁石施工状況（西から）



4 張芝施工状況（南東から）



5 枕木階段2施工状況（南から）



6 礎石（遺構石）表示状況（西から）



1 砕石路盤工施工状況（南西から）



2 真砂土舗装施工状況（北東から）



3 真砂土舗装施工状況（北東から）



4 雨落溝表示施工状況（西から）



5 講堂解説板設置状況（南から）

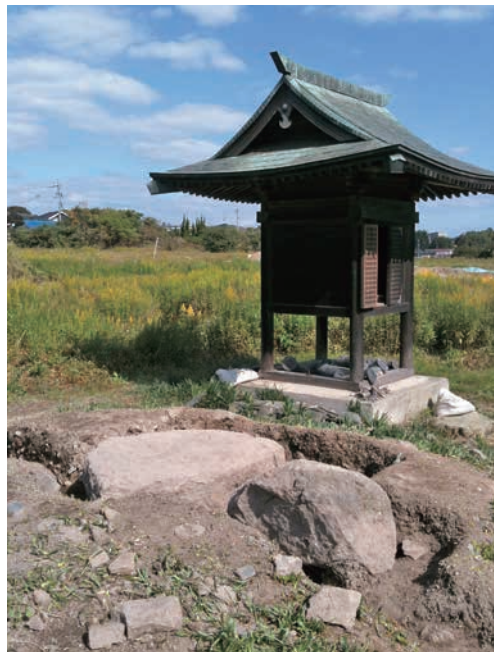


6 北面回廊解説板設置状況（南から）

図版8 講堂地区 平成23年度



1 塚状の高まり 調査前（西から）



2 塚状の高まりと薬師堂（南西から）



3 塚状の高まり（西から）



4 礎石30・31検出状況（南西から）



5 礎石30・31引き上げ後（西から）



6 礎石21-a 検出状況（南西から）



1 塔地区現地見学会（平成23年5月21日）



2 講堂地区現地見学会（平成29年3月18日）



3 あかいわアトラリー2013（平成25年10月）



4 赤磐市史跡シンポジウム（平成25年9月28日）
「発掘が語る備前国分寺と奈良時代」



5 赤磐市歴史まなび講座（平成26年9月27日）
「国分寺と国府」



6 歴史ウォーキング（平成25年11月30日）

赤磐市文化財調査報告 第13集
史跡備前国分寺跡保存整備事業報告書 1

—第 I 期塔・講堂地区—

令和元年12月9日 印刷

令和元年12月10日 発行

編集・発行 岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337

印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山県岡山市北区津高651
